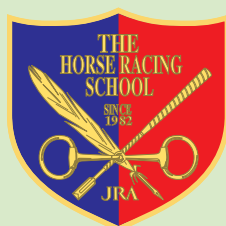


競走馬の管理と取り扱いに関する指針

〔厩務のグラウンドワーク〕



競馬学校

はじめに

当事業所は騎手の養成機関であるとともに、厩舎社会において厩務を担おうとする者や調教などをサポートしようとする者を対象とする訓練機関です。当事業所の指導内容は実技、専門カリキュラムなどの多岐にわたり、騎手課程、厩務員課程それぞれの目的に沿った指導がなされていますが、その共通項目の一つが「厩務」です。この世界において「厩務」は、一見、地味な活動のように見えますが、それは馬を総合的に捉えることができる時間と言えます。各人が「厩務」の質を如何にレベルアップさせることができるかが、強い馬づくりの大きなポイントになります。この意味において、「厩務」は中央競馬を支える根源的な業務と言っても過言ではないでしょう。

さて、競走馬は、より速く走るために肉体、精神の両面において選抜淘汰され、さらに競馬に向けたトレーニングにより、パワーを獲得していきます。つまり、サラブレッド種競走馬は他の品種や労役に供される馬に比較し、テンション（刺激に対する反応の敏感さ）の高さと強さが著しく異なります。競馬関係者には、このような特性をもつ競走馬に対して安全な信頼関係を保持しつつ、彼らが全能力を発揮できる状態に仕上げ、競馬に向かわせることが求められます。このためには、競走馬に対する「十分な理解」と「コミュニケーションの上に成立する確実な躰」という、肌理（きめ）細かなワンランク上の管理が不可欠となります。

当事業所では、まず各課程生に対する養成・訓練の効果を向上させるため、課程生が恐怖心を抱かないことなどを考慮し、それぞれの技量に適合した大人しい性質をもつ訓練用馬も繋養しています。これらの馬に対し、単に乗馬を目的として接するのであれば、少々ラフな管理であっても許容されます。しかし、最終的な職場における「競走馬の管理」を学ぶためには、大人しい馬であっても、その接し方は競走馬に準ずるものでなければ、実践的な訓練効果は期待できません。

一方、当事業所の指導者は乗馬、育成馬、競走馬の各分野のエキスパートであり、豊富な経験を有するコーチとして日々の業務に当たっています。しかし、JRAでさえも「厩務」に係る指導方針は統一化、明確化されていない部分があります。このため、当事業所においては「厩務」の基本事項に対する指導方法の統一化が、一つのテーマとなっています。更に、このような基本的な事項は、往々にして軽視される傾向がみられ、慣習や合理化（という名の手抜き）が優先される場合もあります。別な言い方をすると、「厩務」の基本事項を“知らない”、“知っていても実践しない”、“手抜きをする”などにより騎乗時のみならず厩務中においても事故の発生を招くことが多くあります。競走馬を取り扱う限り、事故を完全に回避することは困難ですが、「厩務」を介して競走馬に対する適切な管理方法や躰を体得することにより、その発生を抑止することは十分に可能です。

そこで、今回 JRA における初めての試みとして、「厩務のグラウンドワーク（以下“基本事項のことをグラウンドワークと呼ぶ）」に関する冊子を作成しました。その内容は、これまでに競馬学校で作成されてきたテキストや資料、歴史の中で培われてきた知識および経験などをベースとしています。また、競馬先進諸国の厩務に関する見習うべき点を取り入れるとともに、最近注目されているナチュラルホースマンシップの考え方などにも言及しつつ、特に、競走馬に携わるうえで、確実に遵守し身に付けなければならない事項を厳選しました。この冊子は所謂“教科書”ではなく、実際に当事業所で実践指導している“実務書”です。更に、理解を深めていただくため、多くの写真・挿絵に加え、できる限りその背景にある考え方を解説しました。一方、厩舎施設構造の相違などにより、競馬場やトレーニング・センターにおける「厩務」の実態とは若干異なる部分もあります。しかし、管理の根拠となる考え方の根底は同じであり、その内容を実践的に身に付けることが、より安全な厩務活動および強い馬づくりに資することと考えております。

この冊子は、前述の様に当事業所の“実務書”として作成しておりますが、広く競馬サークル、特に競馬産業に従事される皆様への参考となれば、幸いです。

平成27年12月

競馬学校

目 次

1. 美 化

1) 環境美化	1
(1) 整理整頓	1
2) 心の清らかさ	3

2. 馬の取り扱い

1) 馬の心理と行動	5
2) 馬の躰	5
(1) 愛撫と懲戒	5
(2) 馬房での捕捉	5
(3) 無口の装着	7
(4) 馬房からの出し入れ	7
(5) 張り方と繋ぎ方	8
3) 診療と装蹄における取り扱い	10
(1) 保定と駐立	10
(2) 診療における保定者の立ち位置	10
(3) 制御力の弱い保定（用手による簡易保定）	11
(4) 制御力の強い保定	12
(5) 枠場での処置	13
(6) 実践例	16

3. 馬の管理

1) 厩舎作業	18
(1) 馬房清掃	18
(2) 手順	18
(3) 飼料の給与方法	19
(4) 作業時の服装	20
2) 馬の手入れ	20
(1) 手入れ道具	21
(2) 手順	23
3) 馬服	26
(1) 役割と目的	26
(2) 種類	26
(3) 着脱手順	27
(4) 長期保管方法	28

4) トリミングとその方法	29
(1) 目的	29
(2) トリミング時の保定	29
5) クリッピングとその方法	33
(1) 目的	33
(2) 方法	33
(3) 種類	34
(4) 注意事項	34
6) パドック・ウォーキングマシンの使用における留意点	35
7) 馬具の管理	35
(1) 馬具	35
(2) プロテクター（肢用）	36
(3) タオルや鞍下ゼッケン	36

4. 引き馬と駐立

1) 引き馬	37
(1) 方法	37
(2) 引き馬に用いる道具	38
(3) 通路での引き馬	40
(4) 当事業所での引き馬方法	41
2) 駐立	42
(1) 方法	42
(2) 撮り方	42
(3) 馬体検査	43

5. 騎 乗

1) 騎乗の手順	45
(1) 確認事項	45
(2) 装鞍と脱鞍の手順	45
(3) 乗馬と下馬	48
(4) 馬装点検	48
(5) 騎乗後の馬体チェック（走路騎乗時）	48
(6) 手綱の持ち方	49
2) 騎乗時の留意事項	49
(1) 馬場の入退場時	49
(2) 馬場内での運動時	50
(3) 歩法別の注意点（走路騎乗時）	50

1. 美化

1) 環境美化

環境美化は整理、整頓、清掃を推進し、清潔さを維持することによって達成される。その目的は、課程生に対する指導の域にとどまらず、怪我をしない（させない）、職業病に罹らない、実技訓練におけるムリ・ムダ・ムラを省いた高い技術体得など、安全管理の基本として位置付けられる。

それぞれの持つ意味は、下記のとおりである。

- ① 整理：要・不要を区別し、不要なものを処分する。
- ② 整頓：所定の場所に必要なものを確実に配置する。
- ③ 清掃：掃除により、ゴミや汚れのないクリーンな状態に保つ。
- ④ 清潔：①～③の徹底により、衛生的かつ安全な現場環境を維持する。

例えば、馬道に不要なものが散乱している状態は、馬がそれを踏みつけて怪我をすること、物見をして精神状態を乱してしまうことなどの原因となる。

また、厩舎地区の環境を美しい状態に保持することは、身だしなみを整えることと同様であり、課程生および指導者にとって極めて重要である。付け加えると、美しい状態で外部からの視察などを受け入れることや模擬レースをはじめとする行事を実施することは、当事業所の指導が課程生に浸透していることを示すことのみならず、社会的なアピールにもつながることとなる。



清掃された厩舎地区

(1) 整理整頓

<馬糞ボックス（ポロボックス）>

馬糞ボックスは、定められた場所に綺麗に並べる。なお、厩舎作業（寝ワラ上げ）で使用した後は、所定の位置に戻す。



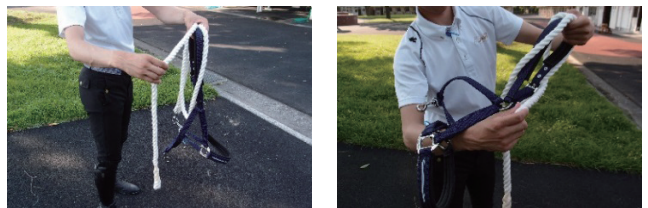
一列に整頓された馬糞ボックス



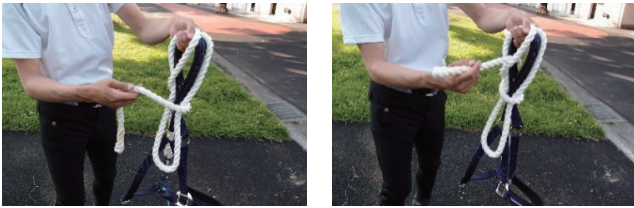
馬糞ボックスのストッパー

<洗い場>

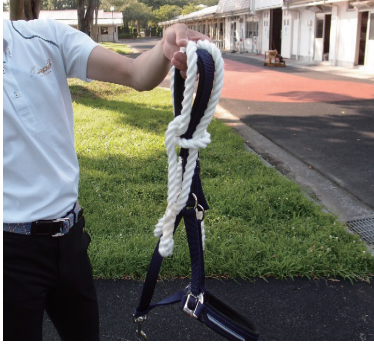
洗い場には、馬装や手入れの時以外、原則として何も置かない。通常時（馬が馬房にいる時）の洗い場は、右側に張り綱が下がり、フックに張り綱のついた無口が掛かっているのみである。無口についた張り綱は、必ず東ねてフックに掛ける。



- ① 無口の頂部分を持って綱を輪にしてまとめ、全体に端綱を直角に回す。



② 端網で中央部をまとめ、その上にできたスペースに通す。



③ 端網を締め、手で持った部分を、鼻革を前にして掛ける。

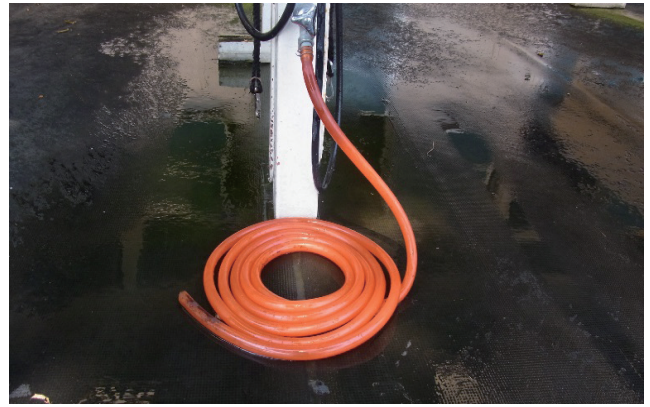
水道用ホースは綺麗にループを作り、シャワーの蛇口は所定の場所に掛ける。



作業終了時の洗い場



網をまとめた無口は、必ずフックに掛ける。



ホースは綺麗にまとめる

<馬道及び厩舎内通路>

厩舎地区の馬道および厩舎内の通路には、原則として不要なものがあるてはならない。馬糞も、気付いた者が率先して清掃（ポロ取り）する。午前中は騎乗訓練が中心であるため、午前の実習終了前に、課程生全員で馬道清掃を実施する。



清潔な飼い作り場



整頓された鼻前



整理・整頓された作業用具



C 厩舎ホワイトボードエリア



自転車置き場周辺

<厩舎作業道具>

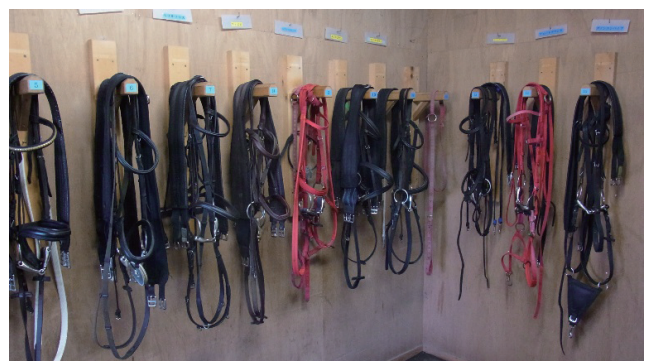
使用した道具は、次の使用に備えて汚れなどを落とし、所定の位置に戻して整然とした状態を維持する。

<馬装具>

鞍や頭絡などの馬装具は、所定の手入れ（P.35参照）を実施し、決められた場所に整頓する。



鞍置き場



頭絡置き場

2) 心の清らかさ

当事業所では、節目の挨拶を励行している。一日は朝の「おはようございます」で始まり、ケースに応じて「失礼します」「こんにちは」などがあり、「おやすみなさい」で床に就く。就職する場がエリア的に限定されていること、昔ながらの良い意味での共同体社会

の側面を持つことから、良好なコミュニケーションを取ることが生活の基礎となる。



礼で始まる訓練

さらに、挨拶には以下の効能があると考えられる。

- ・挨拶をすると気持ちが良い
- ・暗い気持ちを吹き飛ばす力がある
- ・笑顔になる機会が増加する
- ・気持ちが前向きになる
- ・(感謝の意が相手に伝わることも含めて) 相手からの印象が良くなり、人間関係も良好となる
- ・常識のある人という評価が得られる
- ・挨拶から会話が始まる

これらの効能の多くは、挨拶する側の人の心を清らかにするとも言える。このような(平静で明るく邪気がないという意味で)清らかな心をもつことは、(人のみならず)馬に対しても同じであり、彼らとのコミュニケーションが円滑に取れるようになる。すなわち、馬に対しても「おはよう」や「お疲れ様」などの挨拶が極めて重要である。

2. 馬の取り扱い

1) 馬の心理と行動

馬は安心と安全な環境を求める動物種であり、敵意を持たない人に対しては、概ね従順かつ友好的である。また、人と一定のコミュニケーションを取ることが可能である。

しかし、競走馬として選抜淘汰されたサラブレッド種は、他の品種に比較してテンションが上がり易い（敏感かつ興奮しやすい）特性をもっている。また、競馬に向けてパワーが増加した馬は、この傾向が顕著である。このようなサラブレッド種に対し、人馬の安全を確保したうえで十分なパフォーマンスを発揮させるためには、高いレベルのコミュニケーションと確実な躰が求められる。

また、彼らは記憶力に優れた動物であるため、根気強く理解させれば、覚えたことを簡単に忘れることはない。ただし、肉食動物から“追われる”動物であったことから、恐怖心に捉われ易く、経験したことがない事態に対しては我慢が効かない。一方、学習を通じて自身に危害が及ばないことを理解すれば、逃避などを行わなくなる。

馬の心理は、「馬は引っ張られると、引っ張り返す動物」と表現される。不意に引かれた場合、馬は動きを拘束されたとの恐怖心を持ち、それから逃れるために反射的に引き返すのである。

馬の行動パターンは、反射的なものと学習に基づくものとに区分される。恐怖心に始まる反射行動の連鎖は、馬を扱う人にとって極めて危険であり、可能な限り回避すべきである。馬が引かれた際、それに従う行動は学習（躰）に基づくものであることを理解する必要がある。

2) 馬の躰

躰は、プレッシャーのオンとオフの連繋によって形成される。人が求める行動を馬に発現させるためにはプレッシャーを与え（オン）、少しでもその行動を示せば解除（オフ）することが基本である。

(1) 愛撫と懲戒

愛撫はプレッシャーのオフをさらに明確にする目的

を持ち、人の要求に従ったことを褒める場合、あるいは静止を求める場合に実施する行為である。一方、懲戒は馬が人のプレッシャーに対して反抗や敵意を示した場合、あるいは馬のリーダーである人間に対して否定の意志を示す場合に実施する行為である。

愛撫と懲戒は、馬を調教するうえで極めて重要な行為であるが、特に懲戒には注意が必要である。例えば、馬が反抗した際、人はその原因がどこにあるのかを的確に見極め、適切なタイミングと加減をもって懲戒することが求められる。対処を誤った場合は、馬に一層強い反抗心や恐怖心を持たせることになり、人の手に負えない馬にしてしまうこともある。

<具体的な愛撫方法>

- ・優しいトーンで声をかける
- ・頸、肩、鼻梁などを撫でる
- ・手綱を伸ばし、馬に自由を与える
- ・馬の好物（人参など）を与える（ただし、求めた行動を馬が行った直後のタイミング）

<具体的な懲戒方法>

- ・馬の動きを強く制御する
- ・鋭い（強い）声で叱る
- ・鞭で肩や尻を打つ
- ・拍車で軽打する

(2) 馬房での捕捉

馬の躰は、馬房で馬を捕捉する時から始まる。これはリーダーとしての立場を確認する儀式ともいえる。頭絡や無口は、必ず馬房に入ってから装着する。その際、チェーン（馬栓棒）をくぐって入ると、屈む姿勢に加えて下から睨む視線になり、馬に警戒心を生じさせる。

<馬房内での捕捉方法>

- ① 扉を開け、チェーンをくぐるのではなく、必ず外してから馬房に入る。その際、馬に声をかけ人の存在を意識させること。



チェーンを外して馬房に入る。

- ② 後ろを向いている場合は、馬体が人に向くまで、「プレッシャーの負荷」、振り向けば「プレッシャーの開放」を繰り返す。



プレッシャーを与え、馬を人に向かせる。

- ③ 人の方向を向いている馬に接近し、静かに愛撫して馬の左横に立って無口を装着する。

○後ろを向いている馬を迎えに行く行為は、望ましくない。普段から人が馬房に入れば、馬が自発的に人の方を向くように躡ける。

○人參を見せて振り向かせる方法もあるが、これは馬に主導権（リーダーシップ）を握られることとなり、望ましい手法とはいえない。人參を与えらるるならば、指示の受け入れとして無口を付けさせた後である。

○馬が馬房から顔を出している時は、馬の顔の前に手

を挙げるなどの優しい合図によって、一度後退させ、チェーンを外して馬房に入って捕捉する。



後退させる。

- 敏感な馬や調教段階が浅い馬に対しては、無口を装着する前に、まずリードを馬の頸（頭に近い部分）に回して捕捉する。



一旦リードを頸にかけて捕捉する。

○チェーン越しに馬房の外から無口や頭絡を装着する場面を見かけるが、以下の理由から、この捕捉方法は望ましくない。

・チェーンに阻まれ、馬の後退などの急な動きに同調できないために危険である。

・馬に“後引き”癖をつける可能性がある（癖がついてからでは手遅れ）。

・人に従わず、逃げることを覚えてしまう。

・人が馬のテリトリー（馬房）内に入っていないため、人をリーダーとする関係を構築できない（躡っていない）。



(悪い例) 馬栓棒越しの無口の装着

(3) 無口の装着

- ① 左手に無口の項革と引き手を持ち、前方を向いて馬の頸の左側に立つ。このとき、馬が逃避する場合は、右手で馬の鼻梁を抱えこむことにより、その行動を阻止する。



馬の鼻梁を抱えて行動を制御する。

- ② 無口を装着する。
- ③ 左手で無口の頬革を持つことによって鼻梁を抱え、右手で無口の顎革を留める。



無口の装着

- 馴致や躰の過程にある馬で耳への項革の接触を嫌がる場合、顎革の着脱ができないタイプの無口を用いる場合等には、頬革を外し頸から項革を回して装着する。



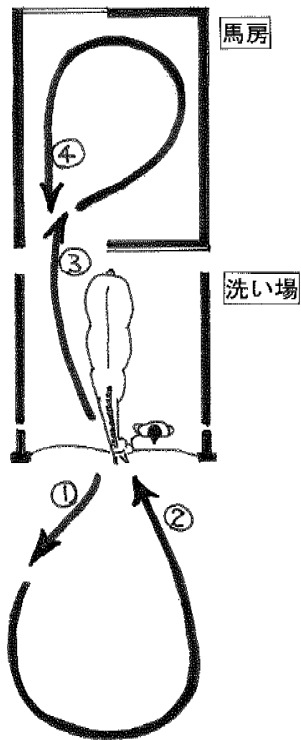
頬革を外しての無口の装着

(4) 馬房からの出し入れ

馬を馬房から出す際は、無口を正しく着用し、馬体をぶつけないよう出口に向かい、人が先導してゆっくり引き出す。

馬房へ戻す際は、左側の張り綱をリードとして無口の鼻革下の環に連結し、まず、洗い場から2～3m 真っ直ぐ前を出してから左回転する。次に、入口に真っ直ぐ向け、引き出す際と同様、馬体をぶつけないよう人が先導して引き入れる。馬房に収容後は、左回転で馬の頭を入口に向け、愛撫をしてから無口を外し、外に出た後に入口のチェーンを閉める（チェーンを閉めてからくぐって出ない）。

なお、馬房からの動き始めの歩様には異常が発現し易いため、十分に観察する。



馬より前を歩いて馬房から引き出す。



馬の前を歩いて馬房へ引き入れる。

(5) 張り方と繋ぎ方

<張り綱を使用する場合>

馬を馬房から引き出し、既に馬繋柱に連結されている右側の張り綱を無口に繋ぐ。リードとして使用した張り綱のナス環を、鼻革下の環から左横の環に着け換え、馬に窮屈さを与えない程度の長さに調節して左側の環に結ぶ。なお、馬が暴れた(ソッパした)際の危険を防止するため、馬繋柱の環にはビニール紐を結び、この部分に張り綱を繋ぐ。



①右張り綱をつなぐ。

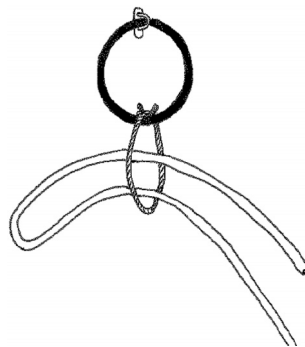


②左張り綱を横に付け替える。



③左張り綱を結ぶ。

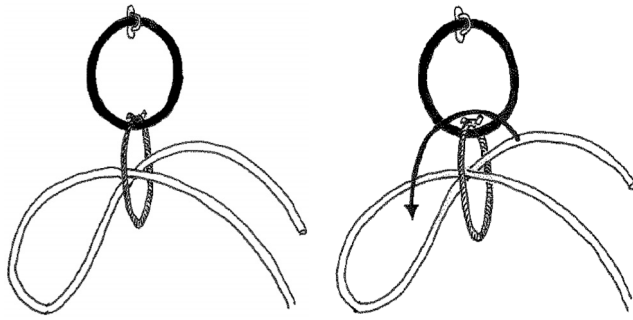
<綱の結び方>



①折り返した綱を紐に通す

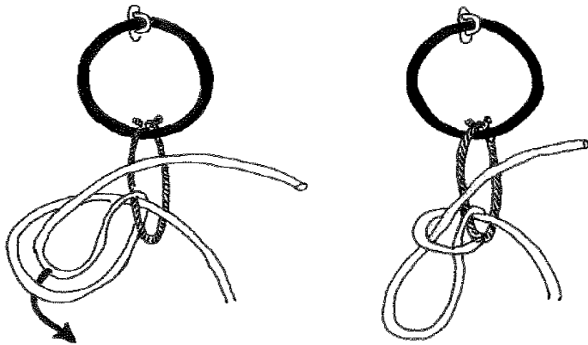


②通した綱を180°捻る



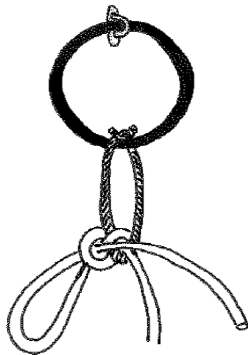
③捻ることで綱の輪ができる

④輪に綱の断端側を折り入れる



⑤輪に綱の断端側を入れる

⑥馬を繋ぐ側の綱を引いて結びを締める



⑦結びの完成



適切な張り綱のテンション



強すぎる張り綱のテンション

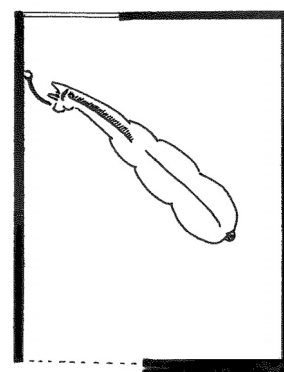
<タイチェーンを使用する場合>

タイチェーン（全長60～70cm）とは、チェーンをビニールやゴムで被覆したものであり、両側にナス環が付いている。当事業所ではロープの両端にナス環を付けたものをタイチェーンとして代用している。

馬房内で無口を装着後、出入口ではなく、通路方向へ左斜めに繋ぐ。タイチェーンで繋ぐメリットとしては、馬の頭部の可動範囲が広がるため、馬が落ち着くことがあげられる。



通路



洗い場

タイチェーン

<注意点>

無口の鼻革の下にある環にビニール紐を結び、この部分にタイチェーンを繋ぐ。この方法は、馬が騒擾した場合、タイチェーンは無口から切れて壁に残るために安全である。逆に壁側で切れた場合、無口に付いたタイチェーンを馬が振り回すことになり危険である。



ビニール紐にタイチェーンを繋ぐ。

3) 診療と装蹄における取り扱い

(1) 保定と駐立

保定とは、目的をもって馬の動きを制限することである。保定の主目的は人馬の安全確保であり、その方法は目的に応じて様々である。例えば、駐立状態の維持を目的とする場合、無口を着けてリードを繋ぐことも保定と言える。一方、治療や装蹄が目的である場合、馬は治療などを嫌がるが多いため、保定には専用の器具や設備を応用する他、薬物による鎮静処置までが含まれる。

診療や装蹄において保定・駐立させる際は、以下の点に留意して取り扱う。

- ・人馬の安全に細心の注意を払う。
- ・必ず獣医師と同じ側に立つ（正面は危険）。
- ・大人しく駐立させて処置できることを目標にする（正しい躰）。
- ・馬の状態を見極め、始めから強い保定道具は使用しない（“弱から強へ”段階を踏む）。
- ・診療の際は、馬の癖を必ず獣医師に伝える（馬を最も理解している者は、当該馬の担当者である）。

(2) 診療における保定者の立ち位置

診療においてリードは馬繫柱に繋ぐのではなく、馬の動きに合わせるため、保定者が保持することを基本とし、無口の顎革は確実に留めておくこと。また、以下の理由から保定者と処置者は、馬に対して同じ側に立たなければならない。

- ・馬は片側に集中して落ち着きやすい。
- ・処置者と保定者が、馬の様子を同時に視認できる。
- ・馬が動いた際にとるべき行動の方向が、一致するために安全である。



処置者と保定者は同じ側に立つ（乾包帯処置）。



獣医師と同じ側に立つ（腰の触診）。



馬房のコーナーに向けて処置（注射）を実施する。



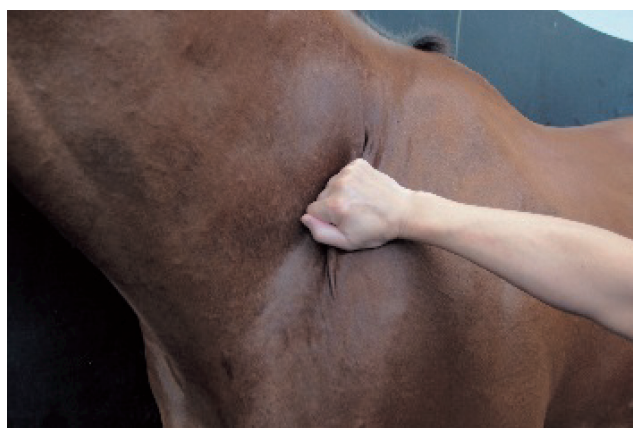
（悪い例）馬の正面に立つ保定は危険である。

（3）制御力の弱い保定（用手による簡易保定）

必要な処置が片側のみであり、ある程度馬が動いても問題がない場合は、以下の比較的制御の弱い保定方法を選択する。

- ① 鼻を保持する（P.29参照）
- ② タテガミをつかむ
- ③ 肩の皮膚を握る（肩を取る）

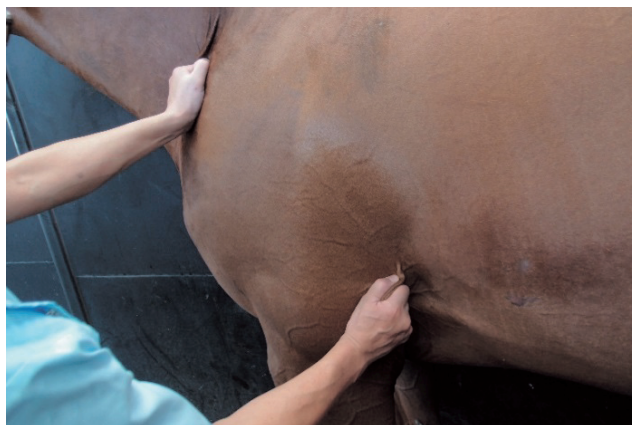
皮膚の取り方や強さにはバリエーションがあり、より強い保定を必要とする場合は、皮下織を含めて巻き込み、両手で広範囲を握り込む。馬の反応を注視し、従順であれば緩める。



肩の皮膚を握る（肩を取る）。

<脇を取る（“肩を取る”のバリエーション）>

脇のみではなく、両手で肩を取る方法の応用として片手で肩と脇を取る。ただし、脇に触られること自体を嫌がる場合があるので、注意が必要である。



脇を取る

<耳の保持>

耳は極めて敏感な部分であるため、通常は保定しない。やむを得ず耳を保定する必要がある場合は、耳根部を手で確実に保持する。後述する“鼻ネジ”の耳への使用は、頭絡の装着を嫌うようになること、耳に触らせなくなることから推奨できない。



耳の保持（耳根部を握る）

(4) 制御力の強い保定

器具などを応用して強い制御を負荷する保定法は、いずれも効果は一過性であり、長時間の処置に対して有効ではないことを認識すべきである。また、馬が我慢の限界に達して逃避を試みる場合、立つ、叩く、蹴るなどの極めて激しい危険な行動が突発的に出現するため、細心の注意が必要である。

○鼻ネジ（鼻捻子）

最も一般的に応用される保定器具であるが、指導者の指示の下で使用する。常に人の退避場所を確認しておくとともに、可能な限り短時間で解除する。また、鼻ネジで鼻翼を閉塞しないように注意する。

<参考①：鼻ネジの適切な使用方法>



①装着の際は、鼻ネジがずれ落ちないように小指にチェーンを掛ける。



②手を鼻革に掛け安定させてから、親指を口角に挿入する。



③ゆっくり手を鼻端に回し、確実に握る。



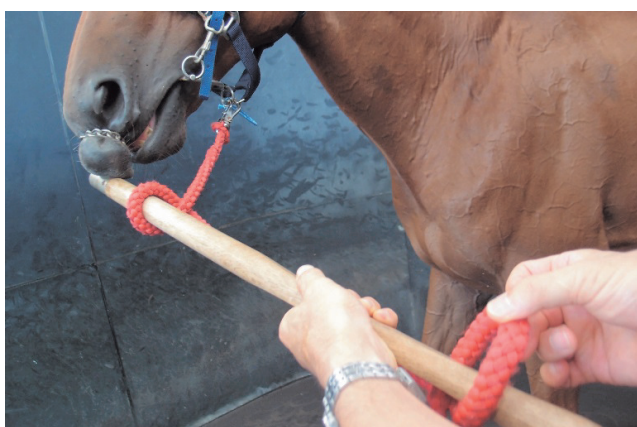
④基本的な鼻ネジ保定

<参考②：鼻ネジの固定>

鼻ネジにリードを巻いて保持する方法であり、狂奔による鼻ネジの飛脱を防止できる。解除は、鼻ネジを緩めてリードから抜き取ることによって容易に可能である。



①リードに輪を作り、鼻ネジの下端から通す。



②最初の輪を上にあげ、もう一つ同様に輪を通す。

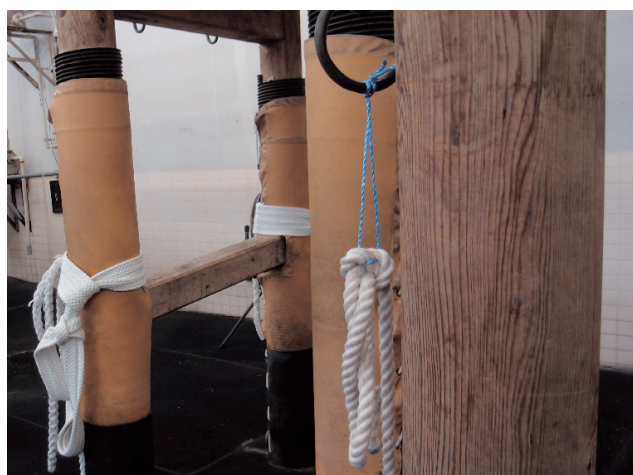


③基本的な鼻ネジの固定

(5) 柵場での処置

柵場は、各種の処置において人の安全を確保するために使用する強固な保定装置である。馬に対しては、事前の馴致（1本のリードで後退させること）が必要である。強い疼痛や恐怖を与えないトリミングの際にも有効である。

柵場には、前柱の環に2本の張り綱（危険防止のためビニール紐を介して繋ぐ）を備え付けておく。



柵場の張り綱

<事前の確認事項>

処置中の人馬の危険回避のため、以下の点に留意する。

- ・柵場周辺に不要なものを置かない。
- ・平打ち縄に弛みがある場合は、締め直す（転倒あるいは脱出の防止のため）。
- ・必要に応じて柵場の左右に補助員を配置する。

<柵場への入れ方：後退>

- ① 1本のリードで柵場の前へ誘導し、柵場をよく見せる。
- ② 方向転換し、馬の頭の向きをコントロールしてゆっくり後退させる（補助員は、馬体の左右のぶれを修正する）。
- ③ 柵場への寄りつきが悪く、2本のリードを使用する場合は、チフニーではなくハミを使用する（チフニーは1本のリードで引き馬を実施する道具であり、無理な後退は、口角や口腔粘膜を損傷させる）。
- ④ 馬を一步一步納得させながら、ゆっくり誘導する。特に、尻縄に触れた際に驚いて突進する場合があるので注意する。誘導者は平常心を保ち、慌てないことが重要である。



慌てず落ち着いてゆっくり後退させる。

- ⑤ 馬体が枠内に収まった後、補助者は胸前に平打ち縄をすばやく回して結ぶ。飛び出し防止のため、必ず肩縄を取る（着ける）。
- ⑥ 保定者は、馬が落ち着くまで斜め前方に位置し、駐立を維持させる。馬が落ち着いたら張り綱で繋いでもよいが、馬の監視は継続する必要がある。
- ⑦ 処置を実施する際は、リードを張った状態ではなく、保定者が保持することが基本である。

<枠場への入れ方：前進>

多くの馬はゲートや馬運車などの馴致において、前向きに入る躰を受けている。このため、馬は躊躇した場合に後方の補助者から発せられる前進へのプレッシャーの意味を理解している。したがって、枠場の後方に十分なスペースがある場合、馬にとって前進して入れる方法はより自然な誘導法といえる。

- ① 胸前の平打ち縄を閉めた状態で馬を引き入れ、誘導者は胸縄をくぐって馬の前方に立つ。
- ② 補助者は、必要に応じて後方から前進のプレッシャーをかける。
- ③ 馬が入ったら、速やかに尻縄を回す。この作業は、二人の補助者の協力によって安全に実施できる。



基本的な枠馬内での保定（保定者は術者側に立つ）

<枠場からの出し方>

- ① 保定者は、馬が飛び出した際に、迅速に横方向へ避ける心積もりをしておく必要がある（補助者は斜め前方で胸前を押さえる）。
 - ② 平打ち縄は慌てず素早くはずし、一歩ずつ声をかけながら、ゆっくり前方に誘導する。また、枠場から出た後は、愛撫を忘れないことも重要である。
- ※一度の失敗（この場合、恐怖を与えること）がトラウマとなり、後々まで影響を及ぼすことを忘れてはならない。



保定者は馬の駐立を維持し、補助者は胸前の平打ち縄を解除する。

<基本的な平打縄の結び方>

○平打縄の結び方

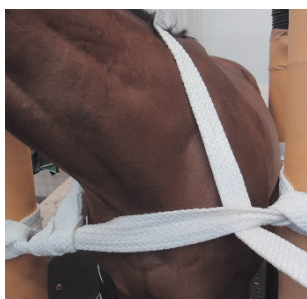


①柱に内から外、下から上に平打縄を通す。



②余り縄は折り返して、下から上に折り込む。

○肩縄の（平打ち縄への）結び方



①胸縄の内側を通す。



②折り返して肩縄の内を通す。



③下に折り返して余端を内に折り込む。

○尾吊りロープの結び方



①尾吊りロープを通して尻尾を折り返し、その上部をまとめて握る。



②手で握った尾の周囲を一周巻く。



③余端を、一周したロープの下に折り返して止める。



④尾吊りを実施した状態

(6) 実践例

<注射>

- 保定者は、常に術者と同じ側に立つ。
- 突進する馬に対しては、馬房のコーナーを利用して駐立させる。
- 馬を落ち着かせるためには、保定者と処置者の何気ない会話が有効である。



診療所での注射処置（リードは繋ぐのではなく必ず人が持つ）

<経鼻投薬>

- 馬には、ハミあるいはチフニーを装着する。
- 保定者は鼻ネジを保持し、術者側で馬の斜め横に立つ。術者は馬の頸部から肩部の間に位置し、助手は術者の背後に立つ。
- 馬が敏感な場合は、杵馬保定を実施する。



保定者と術者の立ち位置に注意

<洗点眼処置（模擬レース後等）>

洗点眼処置は、保定の縮図といえる。若干特殊な状況ではあるが、強い運動後の酸素負債の状態にある馬に対し、力任せに保定することは危険であり、得策ではない。安全と馬の躰を考慮し、可能な限り引き運動によって少し落ち着かせてから実施する。基本を守り、強引な保定を実施しないよう注意する。

- ① 保定者は処置する眼と同側に立ち、リードを保持して馬に駐立を指示する。
- ② 処置者も保定者と同じ側に立って処置する。反対側の洗眼の際は、2人とも処置側に移動する。
- ③ 処置できない場合は、補助者（3人目）の協力が必要となる。この補助者も、保定者や処置者と同じ側に位置することが基本である。
- ④ 補助者は馬に声を掛けながら馬体を壁側に押し、必要であれば、用手による保定を試みる。肩を取ることが最も多いが、この方法は脇、タテガミ、耳に対しても応用できる。



保定者が駐立させた目洗い



肩を取った目洗い

馬体を壁に寄せた処置は、馬の意識を集中させることができるため、事故の発生リスクを低下させるうえで、最も推奨されるポジションである。このポジションを無視し、馬と壁の間に人が入り込むことは、極めて危険である。

また、突進する馬に対しては、馬房のコーナーを利用して処置する。



後ろのコーナーに向けた目洗い

事前に洗点眼の馴致を終え、馬が落ち着いていれば、これ以上の保定（鼻ネジや杵馬）の実施は不要である。競走後は常に実施される洗点眼の場を、殺気立った雰囲気にならないためには、馬の躰と安全な保定に留意する必要がある。まずは関係者が気持ちを落ち着け、保定者と処置者が互いに協力して臨むことが重要である。

3. 馬の管理

1) 厩舎作業

(1) 馬房清掃

馬房清掃の主な目的は、「馬房内の清潔を保つ衛生的な観点」および「馬の健康管理の観点」の2点である。

<馬房内を清潔に保つ衛生的観点>

馬房内は、常に清潔に保たなければならない。これは、種々の疾病が馬房内の不潔さによって発症するからである。

<馬の健康管理の観点>

厩舎作業を実施しながら、馬糞（状態、量、場所）、食した乾草量などをチェックする。馬糞に水分が少なく固いなどの変化がみられた場合は、入念に状態を確認する必要がある。

例えば、「疝痛」の発症時には体温測定や行動学的な観察（前掻きや寝て起きないなど）のみならず、馬糞チェックが重要である。このことにより、早期に「疝痛」の原因を特定し、症状が深刻化する前の治療が可能となる。なお、馬に異常があると感じた場合は、即座に指導者に報告して指示を仰ぐ。

(2) 手順

無口を装着し、馬を洗い場に出して一頭ずつ張り、馬房清掃の終了後は、馬を馬房に戻して次の馬房へ移る。すなわち、必要以上の長時間にわたって張っておかないためには、一頭ずつ馬房に収容する必要がある。

<敷料が「稲藁、麦稈」の場合>

入口付近から清掃をはじめ、綺麗なワラは壁際に積み上げ、濡れワラは乾燥させて再利用するために外へ出す。

ワラの再生作業

○晴天時

- ・基本的に、濡れワラでも形のあるものは全て干す。
- ・ワラはほぐした状態で干す（絡まった状態で干さない）。
- ・干したワラは頻繁に返す（騎乗訓練の合間などを

利用してワラを返す。このことにより、空気を送り込み、湿気を蒸発させてふっくらと仕上げる）。

- ・陽射しの強い日は早目に集め、余熱をとってから馬房に入れる（ワラが熱を持ち過ぎるため）。
- ・乾燥したワラを集め、形があるものは全て再利用する。



干されているワラ

○雨天時

- ・濡れワラは通路に積んでおく（梅雨の時期などは、長時間にわたって濡れたワラを積んでおくと腐敗するため、通路に広げて風を通す）。
- ・なお、厩舎の軒下に固めて積むことは禁止する（ワラが腐敗して使用できなくなるため）。
- ・雨が止んだ場合は、騎乗訓練の合間などを利用して濡れワラを干す。



通路に積まれた干す前のワラ

<敷料が「おが屑、ウッドシェーブ、ケナフ」の場合>

当事業所では、近隣の農家が当事業所の廃棄敷料を再利用するため、ワラを使用しているが、馬によってはおが屑などを用いることもある。

おが屑などの場合は馬房内の馬糞を除去した後、尿で汚れた部分は廃棄する。おが屑はワラや麦稈と比較

して作業時間を短縮できるが、管理が悪い場合は腐敗して熱を持ち、蹄叉腐爛などの原因となる。このため、汚れた部分を確実に廃棄することが重要である。なお、敷料が蹄に詰まりやすいため、護蹄の観点から頻繁な裏掘りの実施も重要である。

(3) 飼料の給与方法

飼い付けは、人馬の主従関係の構築において大切な時間である。例えば、馬房内に人が入って飼桶を装着している間に、馬が勝手に口を突っ込み、飼葉を食べ始めることがないように留意しなければならない。また、馬房内では、いつでも新鮮な水を飲める状態しておく必要がある。さらに、以下の点に留意して飼い付けを実施する。

<飼い付けにおける留意点>

- 飼い付けは、毎日同じ時刻、なるべく全馬一斉に実施する。
- ・同じ時刻の飼い付けは、馬の生活リズムを安定させるとともに、不要なストレスを軽減させる。また、見回り時の食べ残しのチェックは、馬の体調管理の一助となる。
- 給与飼料は、飼桶内でよく混合させる必要がある。



しっかり混ぜた飼料

- 飼桶は肩の高さに固定する。
- ・肩の高さより上部での飼桶設置は、馬にとって不自然な体勢での採食となるために好ましくない。一方、低過ぎる場合は、飼桶で脚を損傷する恐れがある。



馬房内で肩の高さに設置された飼桶

- 落ち着いて食べることができるように、飼桶はフックなどで壁に固定する（飼桶を天秤で釣る方法は、飼桶が揺れて落ち着かず、不慮の事故の原因にもなることから推奨できない）。
- 馬が食べている時は、なるべく邪魔をしない。
- 飼料の配合変更は徐々に実施する。
 - ・一度に配合を全て変更すると、警戒心の強い馬は飼葉を食べなくなることもある。徐々に変更し、味や匂いに慣らしながらスムーズに移行する。なお、飼料の量を変更する場合も、急激に変更すると疝痛などの原因になるため、徐々に増加（減少）させる。
- 飼桶を放置することは馬に遊び癖がついたり、飼桶が破損する原因になるため、食べ終わったら速やかに外す。
- 飼桶はよく洗い、常に清潔な状態にしておく。
- 乾草は適切な量を与える。
 - ・燕麦や配合飼料などの濃厚飼料ばかりでなく、乾草は馬にとって良質タンパクの供給源である。馬の体内で合成できない栄養素が多く含有されており、馬体重の1～2%とされる日量を与える必要がある。なお、馬は単胃動物であるため、与える際は一度ではなく、数回に分ける。

<見回りにおける留意点>

- 見回り時には以下の点に留意し、馬の異常の有無を確認する。
- 馬の様子（呼吸が荒くないか、苦しそうに寝ていないかなど）。
- 飼料の食べ具合（夕飼、乾草の残留の有無など）。
- 食べ終わった飼桶は外し、所定の場所に片付ける。また、翌朝の朝飼をバケツなどに作っておく。ただ

し、バケツは馬にストレスを与えないよう見えない場所に置く。

- ウォーターカップに水が入っているか。
- 馬房の扉が確実に施錠されているか。
- 天候や気温を考慮し、裏戸は適切に開け閉めする（自分で判断できなければ、指導者の指示を仰ぐ）。
- 馬服の状態を確認（馬服のずれや発汗の有無など）する。また、天候・気温を考慮して馬服を着脱する。

<当事業所での飼い付け時間等>

当事業所における飼い付け時刻および飼料内容は、以下のとおりである。

通常時間		夏季時間（7月上旬～9月中旬）	
時間	目 録	時間	目 録
5:30	朝飼い付け 乾草（フェシ-3kg） ※厩舎作業と並行	8:15	朝飼い付け
11:30	昼飼い付け 乾草（フェシ-3kg）	9:25	乾草（フェシ-3kg） ※厩舎作業と並行
16:30	夕飼い付け 乾草（フェシ-3kg、7L7777 1kg）	11:40	昼飼い付け
		15:30	乾草（フェシ-3kg）
		16:20	夕飼い付け
		20:00	乾草（フェシ-3kg、7L7777 1kg） ※見回り当番と並行

飼い付け時間

<当事業所での飼料の内容>

飼料内容は、燕麦・配合飼料・ふすま・塩・カルシウム・あまに煮（整腸のため、休馬日の前日の夕飼などに与える）である。給与量は、毎月末に計測する馬体重や運動内容（強度）によって調整するが、指導者との相談を義務付けている。



燕麦



配合飼料



ふすま



あまに煮

(4) 作業時の服装

馬房清掃や手入れなどを実施する際の服装は、以下の点に留意する。

- ① 動きやすい服装（キュロット、ジーンズなど）
- ② 馬に足を踏まれた際に安全を確保できる靴（安全靴）
- ③ 頭を保護する帽子

<見回り当番>

厩舎作業時と同様であることが好ましいが、当事業所の場合、入浴後の時間帯（20時）の実施であることから、短パン、タンクトップ（肩が見える服装）、サンダル（踵を完全に包んでいないもの）以外の服装は認められている。

2) 馬の手入れ

馬との係りを深めるためには、騎乗のみならず、手入れ作業も極めて大切である。馬は運動すれば汗をかき、砂や土、ほこりなどによって馬体が汚れる。これらを取り除いて清潔に保つことは、馬の健康状態を向上させるうえで重要である。

同時に大切なことは、馬体のチェックである。馬体の隅々まで直接手で触り、注意深く観察する。このこ

とにより、外傷や病気の早期発見や故障の予防が可能となる。また、手入れの間は馬との会話やスキンシップを心がけることにより、馬が落ちつき、心を通わせることが可能となる。このような作業により、馬は人間をリーダーとして受け入れるようになる。更に、手入れ作業は、騎乗訓練をさせてもらった馬への礼儀とも位置付けられる。

このように、手入れは、単に馬体を綺麗にするのみならず、馬との係わりを深めるうえで重要な意味を持っている。

(1) 手入れ道具

当事業所では、以下の手入れ道具（手入れボックスを含む）を課程生に貸与し、定期的（毎月下旬の「厩舎作業」の時間）に道具の管理状態をチェックしている。

道具を常に清潔に保つためには、毎回汚れを落とし、毛ブラシなどは定期的に水洗いして水分を除去した後に、風通しの良い日なたで乾燥させる。ただし、長時間にわたって直射日光に曝すと劣化するため、注意が必要である。



手入れボックス 左：厩務員課程、右：騎手課程



手入れ道具の天日干し

<当事業所で貸与する手入れ道具>



①根ブラシ（木の根、ケンパキン）、②ゴムブラシ、③プラスチックブラシ、④毛ブラシ、⑤トリミングコーム、⑥テールブラシ、⑦裏掘り（ブラシ付き）、⑧汗こぎ、⑨体温計、⑩ハサミ（トリミング用）、⑪テールコンディショナー

①根ブラシ

根ブラシは、ワラや馬糞など、馬体に付着した比較的大きな汚物を取り除くために使用する。なお、毛が抜けるため、タテガミや尾などの長毛に対しては使用しない。

②ゴムブラシ

ゴムブラシは、ゴムがイボ状に並び、マッサージ効果が高い。皮膚に付着しているフケをかき起こしたり、毛ブラシに付着したフケや汚れを取り除くために用いる。また、馬体に付着して固まった泥や汚れなどの除去にも使用する。特に、春先の換毛期に有効である。

ゴムブラシは毛ブラシと同様に、形状や硬さなどが異なる豊富な種類があり、使用部位や用途に応じて使い分ける。頸や胸、尻などの筋肉の豊富な部位に対しては硬めのものを、頭や腰角などの皮膚下に骨がある部分や、皮膚が薄く鋭敏な馬に対しては柔らかいものを使用する。当事業所では、安全面から使用部位や方法が制限される鉄ブラシは使用していない。

③プラスチックブラシ

プラスチックブラシは、根ブラシやゴムブラシの代用として広く応用可能であり、馬体の洗浄にも有用である。

④毛ブラシ

毛ブラシは、皮毛全体を摩擦して全身のフケなどを

除去するために用いる。ブラッシングの際、毛ブラシについたフケや汚れは、ゴムブラシやプラスチックブラシと擦り合わせて落とす。

毛ブラシには様々な種類がある。騎乗前の馬装時に使用する硬めのハードブラシや、運動後の手入れ時に仕上げ用として使用する柔らかいソフトブラシ、ソフトブラシよりさらに柔らかく長めの毛先をもつフェイス用ブラシなどがある。また、綺麗なクウォーターマーク（P.24参照）を付けるためには、ブラシのエッジが立ったものが必要である。



エッジが立った毛ブラシ

⑤ トリミングコーム（すきぐし）

マエガミ、タテガミ、尾などの長毛をすいたり、抜いて整えるために用いる。

⑥ テールブラシ

ブラシの毛先が丸くなっており、毛や皮膚を痛めないよう工夫されている。

⑦ 裏掘り（テツピ）

蹄底に詰まった土や砂、ボロなどの汚物の除去に用いる。先端が鋭利過ぎるものは、蹄底を損傷させることがあるので使用しない。なお、ブラシ付き裏掘は、蹄洗時に便利である。

⑧ 汗こき

汗こきは、馬体を水洗いした後や多量の発汗がみられる場合、水や汗を切るために使用する。プラスチック製のT型やアルミ製の棒型、サークル型などの種類がある。当事業所では、サークル型を使用している。

⑨ 体温計

検温後は水銀柱を下げ、破損しないよう必ずケースに保管する。

⑩ ハサミ（トリミング用）

ハサミはトリミングやテープなどの切断に用い、各厩舎の常備薬庫に保管している治療用の毛刈ハサミとは区分する。タテガミやマエガミの長さ調整には、ハサミを用いてはならない（必要な時は指導者の指示を仰ぐ）。また、尾の長さ調節は指導者の立会いのもとで実施する。



右が治療用の毛刈ハサミ

⑪ テールコンディショナー

ブラッシング前のスプレーは、尻尾やタテガミのもつれを抑えて光沢を維持し、フケや泥などの汚れの付着を軽減できる。また、クシ通りが良くなり脱毛も予防できる。課程生は、各自でスプレーボトルに小分けして手入れボックスに保管する。



小分けして手入れボックスへ

<蹄油>

蹄油は、蹄洗後の蹄の乾燥予防、発育促進、弾力の維持などを目的として塗布する。その他、馬体検査（インスペクション）や展示などの際に、馬体を美しく見せるためにも用いる。

<ホースシャンプー>

皮膚や毛並みを、より美しく健康に保つために使用する。汚れは除去するが、適度な皮脂を残すため、良好な皮膚状態を保つ効果をもつ。

(2) 手順

手入れは常に左側の項部から開始し、次第に全身へ移行する。その後、同様に右側を実施する。馬具（ゼッケン、腹帯など）が密着する部位、肢や蹄には特に注意を払う必要がある。

<騎乗前の手入れ>

馬体の異常の有無を確認するとともに、綺麗なブラッシングによって身だしなみを整え、人馬のいずれもが安全かつ美しい姿で騎乗することを目的とする。

① 異常の有無の確認

静かに声をかけながら目視するとともに、馬体を手で触り、腫れや帯熱、損傷の有無をチェックする。

② 検温

検温は、馬の健康状態を客観的に把握するうえで重要な手段である。馬の左側から左手で尾根部から20cmほどの部位を持ち上げ、濡らした体温計を肛門内に静かに挿入する。脱落防止のクリップを尾の毛にはさみ、3～4分後に取り出す。検温の際はいきなり尾を持つのではなく、素早く身動きできるように半身の体勢を維持して声をかけ、肩、背中、腰の順に触れながら左尻辺りに移動する。また、測定した体温が平常値と異なる場合は、再測定する。検温後は、体温計を軽く振って水銀柱を元に戻す。



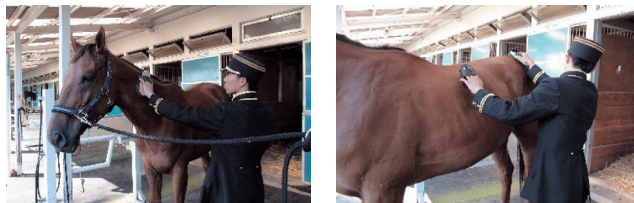
検温の様子

③ 裏掘り

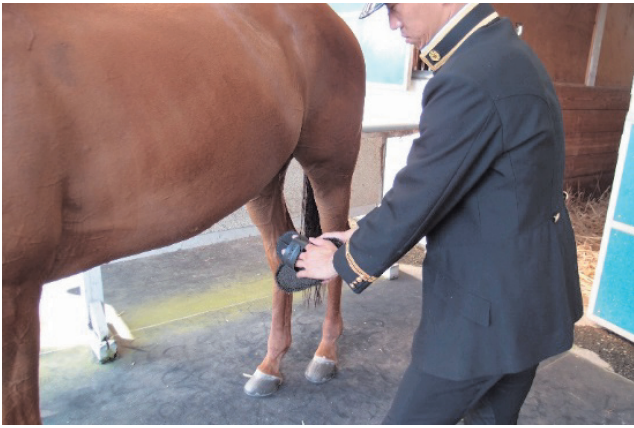
馬の左側に立ち、左前肢、右前肢、左後肢、右後肢の順に、裏掘りで蹄底に詰まっている土や汚物を取り除く。裏掘りでは肢の熱や腫れ、損傷の有無、さらに、蹄鉄を軽く叩いて緩みがないかなどのチェックを併せて実施する。なお、馬の調教レベルが低い場合は、馬の左側で左前後肢を裏掘りした後、右側にまわって右前後肢を実施する場合もある。

④ ブラッシング

ブラッシングは、馬体の汚れの除去のみならず、血行を良好にして新陳代謝を高める目的をもつ。また、外傷や皮膚病などのチェックも同時に実施できる。毛並みに沿って安全にブラッシングができるように、手入れを実施する馬体の部位により、毛ブラシ、その毛ブラシのクリーニング用のゴムブラシを持つ手を変更する。左側のブラッシングの場合、前躯では左手に毛ブラシ、右手にゴムブラシ、後躯では右手に毛ブラシ、左手にゴムブラシと持ち変える方法が基本となる（右側をブラッシングする場合は逆）。



前躯は左手、後躯は右手でブラッシングする。



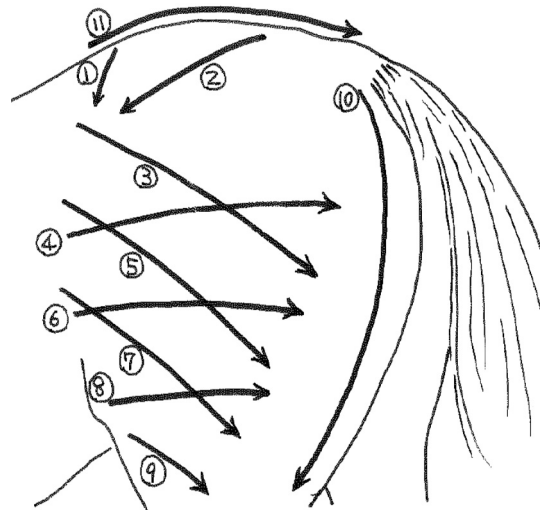
ブラシに付いたフケを落とす。

毛ブラシを用いて毛並みの逆方向に一度こすり、さらに毛並みにそって同じところをこすり返すことにより、フケや汚れを拭う。毛ブラシに付着したフケや汚れは、ゴムブラシにこすり合わせて取り除く。

片手でブラッシングする場合、反対の手を馬体に触れておくことは、馬の動きを察知するうえで重要である。また、時間に余裕があれば、より美しく見せる仕上げとしてクォーターマークを作成することもある。



クォーターマークの一例



クォーターマークの作成手順

⑤ 長毛（タテガミ、マエガミ、尾毛）

まず、手で毛に絡んでいるワラなどを取り除き、テールブラシ（あるいはプラスチックブラシ）によって絡みをとる。最初は先端からブラッシングを実施するが、脱毛を防止するため、片方の手で上部をしっかりと保持する。



尾毛のよじれは、ブラッシングの前に手でほぐす。



片手で尾の上部をしっかりと保持し、まず先端からブラッシングを実施する。



徐々に尾を持つ位置を上げ、長くブラッシングする。

手入れや馬装の仕上げは、タテガミと尾根部に水ブラシを実施し、タテガミは綺麗に右側に寝かせて癖をつける。



マエガミ、タテガミ、尻尾に水ブラシを実施する。

時間に余裕がある場合は、日本の伝統的な馬の“おしゃれ”である“わたり”を編んでみる。



“わたり”を編まれた訓練用馬

<騎乗後の手入れ>

手入れの順序は騎乗前とほぼ同様であるが、馬場の状態や訓練内容、季節・天候により、発汗量や汚れ方が異なるため、それに応じた手入れが必要である。

手入れ後は、原則として十分に引き馬を実施し、馬体を完全に乾燥させた状態で馬房に入れることが望ましい。やむを得ず乾燥が不完全な場合は、クールセンサー・ラグなどの馬服（腹下のベルトがついているもの）を着せる。ただし、乾燥後は必ず馬服を脱がせるか、ステーブル・ラグに着せ替える。

① 汗を拭く

鞍下や帯径などに多量の発汗がみられる場合は、水を含ませたスポンジやタオルで洗い流し、汗こきで水を切る。その後、乾いたタオルで拭き取る。

② 肢・蹄の手入れ

前肢は肘から下方、後肢は飛節から下方を水で洗い流す。その後、乾いたタオルで拭き取る。なお、汚れが軽度な場合は、根ブラシを用いた上から下への小刻みなブラッシングによって払い落とす。

特に、肘には汚れがたまりやすく、また、脇や股は目が届きにくく、鋭敏な部位でもあるため、毛ブラシやタオルを用いて丁寧に手入れを実施する。

蹄は、まず裏掘りで詰まっている泥や汚物を取り除く。その後は蹄鉄を軽く叩き、その音によって緩鉄の有無をチェックする。次に、蹄の表裏全体を水で洗う。蹄又側溝は汚れがたまりやすい場所であるため、より丁寧な洗浄が必要である。最後に蹄が乾燥し過ぎないように、蹄油を塗布する。

③ 頭部・陰部の手入れ

水を含ませた絞ったタオルで額、鼻、口、目、耳、肛門や陰部の周囲など、馬の肢が届かない部分を拭く。

④ ブラッシング

- ・騎乗前と同様に毛ブラシとゴムブラシを使用し、毛ブラシで毛並みと逆方向に一度こすり、フケや汚れを浮かせ、毛並みに沿って同じところをこすり返して拭う。

- ・最後に仕上げ用の毛ブラシを用い、毛並みに沿ってブラッシングする。

- ・なお、ブラッシングや長毛の手入れは、午後の厩舎作業の時間などを利用し、再度入念に実施する。

<丸洗い>

発汗が著しく、洗った馬体を乾燥できる場合は丸洗いを実施する。プラスチックブラシなどの水に強い素材のブラシを用い、洗う手順はブラッシングと同様である。

顔は濡らしたタオルで十分に拭くことが基本であるが、シャワーで流す場合は耳に水が入らないように水压を弱めるなど、細心の注意を払う必要がある。慣れていない馬は、少しでも耳に水が入ると予測困難な反応を示すことがあるため、張り綱を外して実施する。



水が入らないように、耳を手で押さえて丁寧に水をかける。

3) 馬服

(1) 役割と目的

馬体を保温してコンディションを維持することを目的とし、様々な馬服が使用される。昼、夜、野外放牧用、運動前後に着用するもの、あるいは雨天用など、それぞれの状況に対応するため、馬服の種類は豊富である。

<馬房や放牧、引き運動で用いるもの>

- ・放牧や輸送時の天候や気温変化への対応
- ・寒冷期の冬毛の抑制
- ・アブやハエからの防護

<騎乗時に用いるもの（エクササイズ・ラグ）>

- ・準備運動や整理運動時の体温低下を防止
- ・調教中に腰部諸筋が冷えて硬化することを防止
- ・運動中に発汗を促すことによる過肥への対応

<馬服着用の注意点>

必要以上に厚着をさせて、馬服の下に発汗させないように注意しなければならない。これは、汗が冷えることによる皮温の低下により、痙攣や血行障害、筋肉・関節の障害など、様々な問題が引き起こされるからである。季節や昼夜の馬房内温度の相違によって状況が変化するため、着用後は馬服の下に手を挿入して発汗の有無を確認する。このように馬服の着用においては、頻繁なチェックと臨機応変な判断が求められる。

(2) 種類

当事業所では、以下の馬服を着用している（11月頃～3月頃）。状況に応じて適切な馬服を使用し、馬体をケアすることが大切である。

<当事業所で着用している馬服>

①ステーブル・ラグ

冬季に厩舎内で使用する。



ステーブル・ラグ

②クールセンサー・ラグ

通気性と保温性のよい素材であり、運動後に馬体を急激に冷却させないために使用する。



クールセンサー・ラグ

③エクササイズ・ラグ

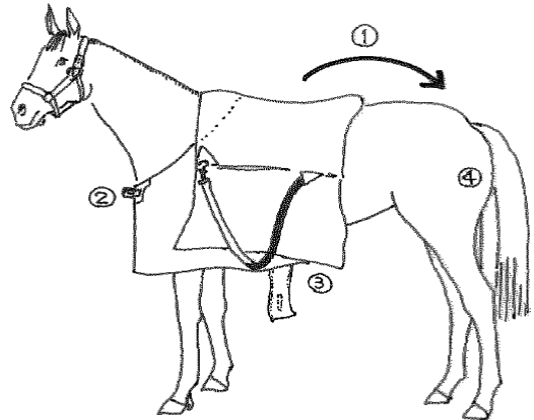
調教や運動の際に、腰部緒筋の冷えを防止するため、鞍下に装着する。脚による馬服の擦れを防止するため、ゼッケンの下方部分を折って使用することもある。



エクササイズ・ラグの装着例

(3) 着脱手順

<馬服の装着方法>

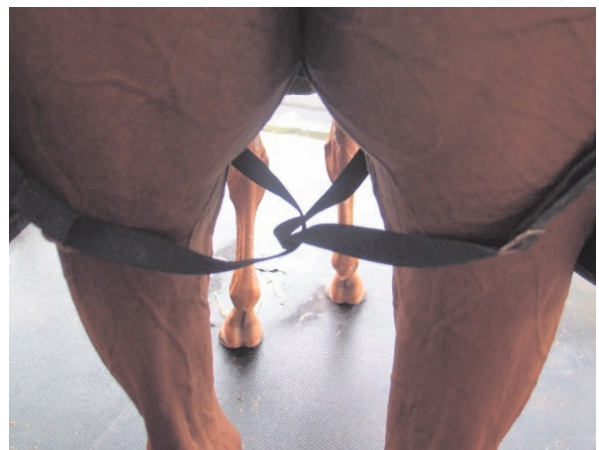


- ① 馬が驚かないように、二つ折りにした馬服を静かに背中へかけ、尻の方へ折り返す。
- ② 落下防止のため、胸部の金具をとめる。



馬服を馬にかけたら、まず、胸前の金具を止める。

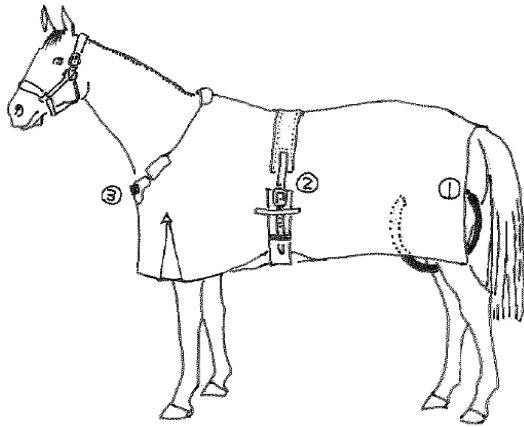
- ③ 長さを調整して腹帯を止める。
- ④ 股下で後肢のレッグストラップを交叉させて止める（ずれ防止）。



レッグストラップは、股間で交叉させて止める。

<馬服の脱着方法>

まず、ブラシで馬服表面のホコリや汚れなどを落とす。



- ① レッグストラップを外すが、ストラップが垂れ下がらないように馬服の金具へ止め戻す。



レッグストラップのフックは、止め戻しておく。

- ② 腹帯を外す。
③ 胸部の金具を外す。
④ 胸部から臀部の方向へ滑らせるようにして脱がせる。
⑤ 左右前後の4つ折りとし、所定の場所に掛ける。



脱がせた馬服は、洗い場の仕切り板にたたんで掛ける。

(4) 長期保管方法

次シーズンの使用に備えるため、デッキブラシなどによって綺麗に洗浄してから保管する。

- ① 数日間、洗剤入りの水に漬けて汚れを浮かす。
② デッキブラシなどを使用して綺麗に洗浄する。



デッキブラシで汚れを落とす。

- ③ 天日で干す。



広げて天日で干す。

- ④ 完全乾燥後は綺麗にたたみ、所定の場所に整理して保管する



綺麗に折りたたんで、所定の場所に収納する。

4) トリミングとその方法

(1) 目的

トリミングは、自然の状態で伸び過ぎた長毛をカットすることや抜くことにより、競走馬としての身だしなみを整え、素軽さや美しさを引き出すことを目的としている。人間が髪を切ったり、ヒゲを剃ったりすることと同様である。

(2) トリミング時の保定

トリミングは2人で協力して実施するが、「スタンド!」「じっと!」という言葉で我慢できるようなことが理想である。また、強い痛みを伴うものではないため、ある程度の握力があれば、手で鼻をつかむことによって容易に落ち着かせることができる。鼻端をつかんだ後は、馬の目がトロツとするまで10秒間程度待つて処置を開始する。大人しければ握力を緩め、動きそうになれば再度強く握る。この繰り返しにより、最初は嫌がる馬も次第に慣れてくる。この際、鼻端の表面を握るのではなく、上唇の内側に親指を挿入して握ることにより、外れにくく力を入れやすくなる。



①親指を上唇の内側に入れて鼻端を握る。



②目がトロツとした後に処置を開始する。



(悪い例) 鼻端の表面を左右から握るとはずれ易く、握力を消耗する。

さらに強い保定が必要な場合は、鼻ネジを用いる。しかし、この方法は効果が大きい反面、長時間に及ぶ場合は逆に暴れて危険なこともある。このため、鼻ネジの使用 (P.12参照) に際しては指導者の指示を仰ぎ、枠場の使用も検討する。

<耳・あごひげ・口ひげ>

耳の毛が伸びている場合、だらしなく鈍重に見える。このため、普通の紙切りハサミを使用して毛をカットする。ハサミを使用する前には、耳元で空切りして音に慣れさせてから、手で馬の耳を軽く握り、はみ出した毛をカットする。



片手で耳を軽くしぼり、はみ出した毛を上から下にカットする。

刃先のみを使用した場合は、不揃いになりやすいため、刃全体を大きく使って直線的にカットする。セリ展示などでは耳内部までカットする必要があるが、当事業所では外部のみに留めている。



トリミング（耳）前



トリミング（耳）後

また、あごひげは毛の生えている方向に逆らうように、ハサミでカットする。好みにもよるが、さらに美観を向上させるため、口ひげをカットする場合もある。

<タテガミ>

伸びたタテガミは、騎乗時に手綱に絡む問題が生じるとともに美観も損なうため、ある程度の長さ（10～15cm）で自然な状態に揃える。ハサミでのカットは切り口が直線的になって不自然に見えるため、クシなどで抜く。馬体が温まっている時は、毛穴が開いて抜けやすいため、暖かい日や運動後に実施する。嫌がる馬は、一度に多くの毛を抜くのではなく、少量ずつ実施して慣らす。タテガミ量が少ない馬に対しては、すきバサミで毛の先端の長さを調整することもあるが、稀である（指導者の指示を仰ぐこと）。

馬を観る際、頸のラインはその印象を決定する重要なポイントである。馬体の表（おもて）は左側であることから、タテガミは必ず右側に寝かせる。癖毛は、手入れ後や騎乗前などに水ブラシで右側に確実に寝かせ、少しずつ改善する。また、三つ編みなどにより、右側に寝る癖をつけることも有効である。

※タテガミ手入れの手順

- ① 必要に応じてコンディショナーをスプレーし、プラスチックブラシなどで絡まっている部分も含めて全体的にブラッシングする。
- ② クシが通るようになったら、長い毛の先端を幅広くつまみ、残りの毛をクシで上方に上げる。



- ③ つまんだ長い毛をクシに巻きつけて引き抜く。全体の毛が適量で短くなるまで、この作業を繰り返す。



※引き抜く際は、巻きつけた毛を一度に引っ張るのではなく、クシを斜めにしてゆっくり引く。1本ずつ抜くイメージで実施することにより、馬は驚かず慣れてくる。



④ 最後に全体をブラッシングし、はみ出している毛を手で引き抜いて整える。
※寝かしたタテガミの外側ではなく、内側（馬体側）の毛を抜くと右側に整えやすく、仕上がりも綺麗にみえる。



トリミング（タテガミ）前



トリミング（タテガミ）後

<マエガミ>

マエガミが多い馬は、タテガミのトリミングと同様に根元から抜く。均一に揃えるのではなく、中央を最も長くして扇状に整えるが、短くし過ぎないように注意する。



マエガミ

<ブライドルパース（頭絡の通り道）>

頭絡の項革が通る部分は、ブライドルパースと呼ばれている。この部分のタテガミを5cm程度切ることにより、頭絡の装着や手入れが容易になるとともに、頭部をスッキリと見せることができる。実際に頭絡を装着し、確認してから切ると失敗が少ない。カット部分は、毛の伸長に応じてこまめに手入れする。



カットは前方から後方に実施する。



カット後、無口を装着

<尾>

尾は量が豊富なほど力強く美しいとされるが、タテガミと比較して長く絡みやすいため、丁寧なブラッシングが必要である。絡み部分はコンディショナーをスプレーし、手でほぐしてからブラシをかける。

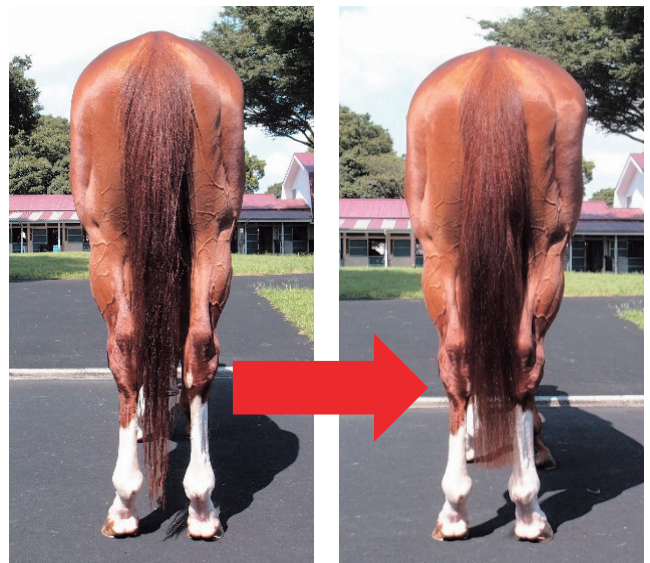
また、長過ぎる尾は見栄えが悪く、馬自身が踏むこともあるため、先端を切り詰める。その際は、尾根部に手を挿入し運動時の尾の長さを再現し、その状態を確認してからカットすることにより、切り過ぎを防止できる。一般的な長さは、後肢の球節の上部である。



尾根部に手を挿入した状態でカットすると、切り過ぎの防止に加え断端が斜めにならない。

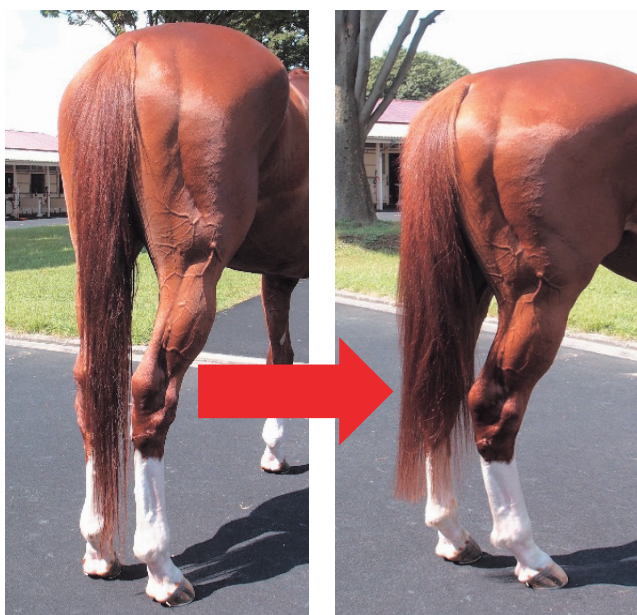


数回に分けて微調整しながら、球節の上部でカットする。



①カット前

②カット後



①カット前

②カット後

<距毛>

距毛は重種馬の特徴であり、長すぎると馬が重たく見えるため、目立つ場合は短く切り揃える。このことにより、肢がすっきり見え、動きも軽快に見える。

ただし、距毛には球節掌の擦傷（クモズレ）防止の役割もあるため切り過ぎに注意する。



右前肢の距毛のカット



左前肢の距毛のカット

5) クリッピングとその方法

クリッピングとは、体毛を短く刈り込むことをいう。競走馬は冬毛を伸ばさない管理が望ましいが、当事業所では訓練用馬の効率的な管理の一つとして実施している。

(1) 目的

冬季は冬毛が伸び、調教や運動で多量に発汗すると、乾燥や手入れに時間がかかるばかりでなく、馬体を冷やすことになる。冬毛はブラッシングしても手入れが行き届かないが、クリッピングの実施により、馬体が短時間で乾燥して手入れが容易になる。

(2) 方法

<クリッピングに使用する道具>



コードレスバリカン

※クリッピングの手順

- ① 明るく馬体が見やすい場所で実施する。
- ② 保定する助手を確保する。
- ③ 肢、鞍下などの刈らずに残す部分に、フェルトペンやチョークで印をつける。
- ④ 電源が入っていない状態で、馬にバリカン（コードレス）をよく見せて慣らす。
- ⑤ 肩、頸部、腹部、尻の順に毛並を逆走するように刈る（尾の最上部は逆V字に残す）。
- ⑥ ブラッシングによって刈り残した部分をチェックし、終了したら馬服を着せる。

<クリッピングの困難な部位の手順>

【**膝部**】 膝部のたるんだ皮膚を持って指で伸ばし、毛並（旋毛）に対して90度以上の角度をつけて刈る。



膝部のクリッピング

【**喉**】 助手は可能な限り頭部を高く保持し、若干、術者の反対側に向ける。術者は皮膚を指でつまみ、たるませないように保持して刈る。



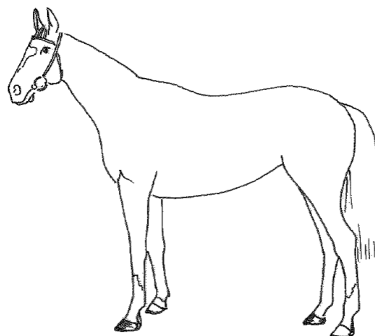
喉のクリッピング

(3) 種類

当事業所で実施するクリッピングは、以下の2種類である。

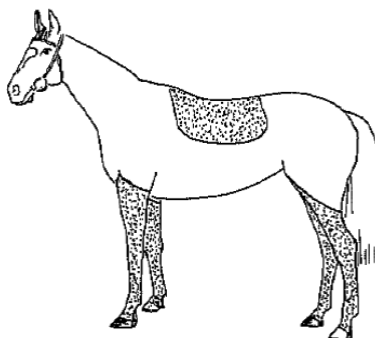
<ショークリップ（供覧用）>

タテガミと尾を除き、肢、馬体、頭部まで刈る。



<ハンタークリップ>

四肢と鞍下の長毛を残す。



(4) 注意事項

- ・バリカンの作業音に反応する馬に対しては、耳に綿を詰めたり、耳つきメンコを装着する。
- ・バリカンの刃が過熱した場合は、即座にクリップを中止し、洗浄して刃を冷却する。過熱した刃は馬にとって不快であり、効率が上がらず危険である。
- ・クリッピングの際は張り馬ではなく、助手が保持するが無口とチフニー、チェーンシャンクなどの制御可能な装具を用いる。
- ・十分な強さで制御されている場合、馬が慣れるまで安全な距離で保持して褒める。このことにより、馬は逃げようとすれば叱られ、静止していれば褒められることを学習する。
- ・静かな駐立以外は、痛みを感じることを馬に学習させる。

- ・保定に鼻ネジを用いた場合には、使用の前後に上唇をマッサージして不快感を除去する。決して耳ネジは、使用してはならない。
- ・人馬ともに危険が伴う場合は、獣医師による鎮静処置が必要な場合もある。

6) パドック、ウォーキングマシンの使用における留意点

放牧あるいはウォーキングマシーンを使用する際は、チフニーあるいはチェーンシャンクを着用して出し入れする。放牧においては踏み掛け防止のため、前肢へのベルブーツ（ワンコ）の着用を義務付けている。なお、馬服およびプロテクターの着用に関しては、指導者に一任する。

7) 馬具の管理

(1) 馬具

馬具には多くの皮革が使用されているが、革は手入れを実施しなければ柔軟性を保てず、馬を傷つける場合もある。また、ひび割れて切れることもあり、柔軟性が低下した革は、非常に危険である。

定期的にスポンジとサドルソープによる手入れを実施し、硬化がみられる場合は保革油を塗布する。特に、折り目や馬体に直接触れる部分は、丁寧な手入れが必要である。手綱や腹帯、鍔革の縫い目は劣化しやすいため、日頃から重点的に点検する。縫い糸のほころびなどの兆候（あやしいと思われるものも含む）を発見した場合は、直ちに指導者に報告して交換・修理する。

また、鞍下ゼッケン、肢巻などは基本的に毎日洗濯し、清潔な状態を維持する。

<頭絡>

- ・革製の頭絡は、騎乗後によく絞った濡れタオルによって汚れや汗を拭き取る。また、週1回はサドルソープによる手入れを実施する。
- ・ナイロン製の頭絡は、騎乗後にマルタンガールを含めて頭絡全体を水洗いし、タオルで拭いて水を切っておく。また、午後の厩舎作業の時間などを利用し、尾錠部にサビ防止用の油を注しておく。
- ・ハミは騎乗後に水で洗い、タオルで拭いておく。
- ・週1回の馬具の手入れ時には、革製、ナイロン製の

- いずれの頭絡も、分解して手入れと点検を実施する。
- ・騎乗後や手入れ後は、頭絡置き場の所定の位置に掛ける。



整理された頭絡置き場

<腹帯>

- ・腹帯（革製）は、騎乗後によく絞った濡れタオルで汚れを拭き取る。また、週1回はサドルソープによる手入れを実施する。
- ・騎乗後や手入れ後は、頭絡とともに馬具置き場（頭絡掛け）の所定の位置に保管する。

<鞍>

- ・鞍は、騎乗後によく絞った濡れタオルで汚れを拭き取る。
- ・上記に加え、乗馬鞍や調教鞍などの革製の鞍は、週に1回、サドルソープによる手入れを実施する。
- ・騎乗後や手入れ後は、鞍置き場の所定の位置に保管する。



サドルソープによる鞍の手入れ



鞍置き場

<その他>

馬具を交換した場合、古いものは馬具庫などに放置することなく、指導者に返却する。

(2) プロテクター（肢用）

使用後は、タワシなどで水洗いし、水をよく切った状態で干す。なお、ゴムの劣化や伸びを防止するため、直射日光を避け、マジックテープやゴム部分を干し竿に掛けないように干す。



プロテクター掛け



良い例



悪い例

(3) タオルや鞍下ゼッケン

使用したタオル、鞍下ゼッケン、肢巻、腹帯カバーなどは、厩舎毎に洗濯カゴにまとめ、騎乗訓練終了後の厩舎作業の時間を利用して洗濯する。

洗濯物の乾燥は、縮まないように天日干とし、綺麗にたたんで所定の棚に整理する。



使用したタオル類は、洗濯物カゴに入れる。



天日干し中の肢巻・腹帯カバー



整理されたタオル・ゼッケン置き場

4. 引き馬と駐立

1) 引き馬

(1) 方法

引き馬は、人馬の主従関係を構築する基本的なトレーニングである。小さな音声や人の動きにより、停止および発進できる状況が理想である。馬が御者に対して注意を払い、御者が求める行動を理解して反応することが重要である。馬を的確にコントロールするためには、その気性や調教進度、運動環境などを考慮し、常に馬に対してリーダーシップが取れるように、無口にチフニーやチェーンシャンクを装着する必要がある。

御者の指示を伝達するためには、人は優位性を保持し、馬から信頼される存在でなければならない。そのためには、馬の行動を予測し、問題が起こる前に先手を打つことが重要である。

馬の勝手な動きを制御することによって服従心が生み出されるが、これは力づくではなく、ボディランゲージと適切な合図や立ち位置による御者の意志の伝達でなければならない。ハミやチフニー、チェーンシャンクなどの装具は、必要に応じて馬に強い合図を送るために装着するが、常にプレッシャーを与え続けるものではないことを銘記しておく。

引き馬において御者は、適正な立ち位置を厳守し、ガラガラと歩かせるのではなく、分速110m程度の闊達な歩様で運動させる。



闊達な引き馬

具体的には、御者は馬の肩部の位置に立ち、馬に前進気勢を与える。すなわち、御者が馬についていくイ

メージであり、場合によっては長鞭や音声を用いて後肢からキビキビ歩かせる。さらに、御者が向かう場所へは、どのような場所であっても、馬は信頼して進まなければならない。御者の指示（扶助）に従わない場合は、その原因（扶助に従いたくない、扶助の意味が理解できないなど）を探し、集中力と自制心をもって矯正しなければならない。なお、安全と確実な制御のため、御者はグリップ力のある手袋を着用することが望ましい。



常歩の躡：初期段階では、長鞭を持って確実に歩かせる。

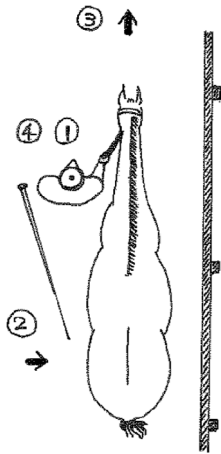
<躡（馴致）の手順>

調教の初期段階においては、左側を歩く御者の鞭の刺激による後躯の右側への逃避を防止するため、馬の右側に牧柵や壁がある場所を選択する。

馬が御者の指示に対して的確に反応できるように、音声や鞭を利用して以下の手順で繰り返し調教する。

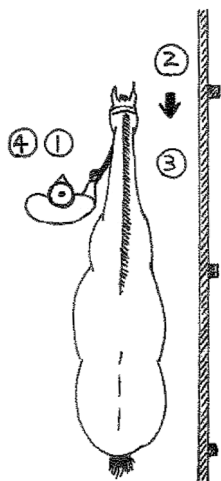
<馬を前進させるとき>

- ① 御者の音声による合図
舌鼓や張りのある強い声で「前!」、「ゴー」と指示する。
- ② 御者の鞭による推進
- ③ 馬の発進、加速
- ④ 上手くできたらプレッシャーを解除し、愛撫と優しい言葉をかける。



<馬を停止させるとき>

- ① 御者は声によって「停止」の合図を送る。
語尾を引き伸ばし、やさしく下げるトーンで「止ま〜れ〜」、「ホーラ」、「ホールト (halt)」と声をかける。
- ② リードを抑える、あるいは馬の頭部を上げる。
- ③ 馬は減速、停止する。
馬の肩が御者の立ち位置より前方で停止しようとした際には、ただちに御者はハミやチフニー、チェーンシャンクを作用させ、その動きを抑制する。
- ④ 上手くできたらプレッシャーを解除し、愛撫と優しい言葉をかける。



御者の要求に馬が応えた際、ただちにプレッシャーを解き、褒めて愛撫することを忘れてはならない。このことにより、馬は自信を持ち、理解が早まる。最終的には、鞭などによる物理的な推進合図がない状態でも反応できるように、反復調教する。

<後退調教の手順と効果>

引き馬では、リードのプレッシャーがなく、引かれていない状態でも、馬が人の進む方向とスピードについていくことが理想である。進行方向に存在する対象物（障害物）に対して躊躇した場合は、直線的に引くのではなく左右への誘導を試みるが、この指示に従わない場合は、後退の指示も効果的である。

後退は、野生環境下においては不自然な動きであるため、馬自身が必要性を認識しなければ、この行動は起こさない。したがって、御者の指示による後退は、不自然な行動を馬が受け入れたことを意味し、人に対する服従心を高めるうえで効果的である。

実施方法の一例としては、馬の左斜め前方に位置して、片方の手を上げるとともに、チフニーやチェーンシャンクを後ろに引いて後退の指示を出す（上げた手で馬の鼻梁を軽打し、後退の動きを誘発させる方法もある）。馬が理解できれば、手を鼻前に上げることで後退をするようになる。馬が指示を受け入れ、2、3歩後退したところで動作を止める。

なお、後退の継続的な指示は、馬に負荷が掛かり過ぎるため、怪我の原因になるとともに、苦しい状況からの逃避手段として突進、立ち上がりなどの悪癖を誘発させる可能性がある。後退の終了後は軽い前進指示を出し、反応した場合は直ちに褒める。

このような手順により、リードにテンションがない状態で行動できれば、障害物が存在する場合や物見をする状況が発生した場合でも、第一に御者の指示を尊重するようになる。

一方、反抗による立ち上がり、前肢での叩き、突進など、御者の優位性を無視する行為を見せた場合は、強い懲戒が必要である。その際の注意点は、御者として怒りの感情を発現させないこと、タイミングを逸しないことである。また、叱って改善された瞬間に、優しく褒めること（愛撫）を忘れてはならない。

(2) 引き馬に用いる道具

<リード>

リードは引き馬の際に用いる道具であり、張り綱と混同してはならない。当事業所では引き馬用として、課程生に革製のリードを貸与している。



革製のリード

<チフニー（通称：ハート衝）>

チフニーは展示や引き馬、放牧、ウォーキングマシンへの移動の際には、安全を確保するために無口の上から装着する。

ハート形の形状をしており、使用する際は上部（ハミ部分）を口内に入れ、下方のリングに1本のリードを連結する。この方法により、馬が暴れた際に御者は、バランス良くかつ確実にハミとして作用させることが可能となり、引き馬での制御に効果的である。なお、下部のリングではなく、ハミ横のリングに2本のリードを装着していることが散見されるが、これではハミの効果が低下する。ハミのくぼみが深いものは、馬の下顎に強く作用することから、使用においては細心の注意が必要である。

当事業所では、チフニーと革製リードを課程生に貸与しており、その管理を含めて適切な使用方法を体得することが重要である。



サイズ・形状の異なるチフニー ※右は作用が強い



チフニーを装着



チフニーでの引き馬

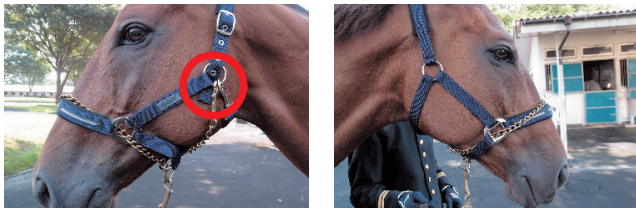
<チェーンシャンク>

チェーンシャンクは、リードにチェーンがついているものであり、無口での引き馬の際に使用する。種々の装着方法があり、その手法に応じてチェーンの長さも各種存在する。チェーンを馬の鼻梁の上に回し、無口の鼻革横の環を通す方法が、一般的である（装着方法が多岐にわたり、作用も変化することから、当事業所の課程生はチフニーのみの使用を基本としている）。

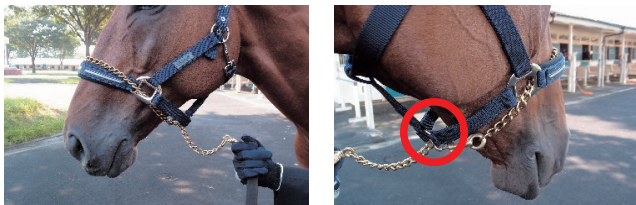


チェーンシャンクのチェーン

馬が暴れた際、リードを持つとチェーンが鼻梁を圧迫して強い合図を送ることができる。着脱には手間がかかるが、道具の作用が強いため、躰のできた馬では着用のみによってプレッシャーをかけられる。チェーンを無口の鼻革に巻いて使用するため、丈夫な作りの無口（革無口など）が望ましい。



パターン①：鼻梁に回し、顎革に止める装着法

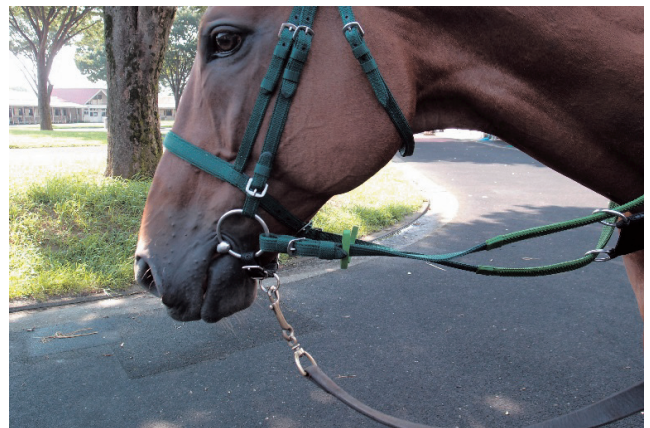


パターン②：鼻梁を一周させる装着法

<カップラン>

カップランをハミ（銜環）に常備することにより、頭絡を装着した状態でも、バランス良く1本リードでの引き馬が可能となる。

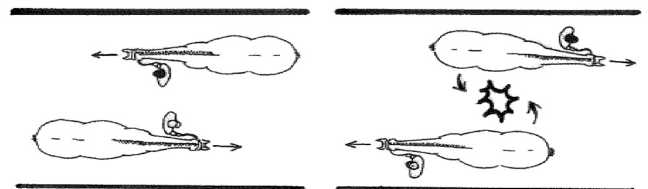
この馬具は、引き馬のみならず、頭絡に常備することにより、ゲート練習の誘導や頭絡を着用した駐立での写真撮影などに有効である。当事業所では、すべての訓練用馬の頭絡にカップランを常備している。



カップランを用いた引き馬（走路）

(3) 通路での引き馬

通路や道路などで引き馬を実施する際、馬と馬、馬と車がすれ違う場合は、進行方向に対して右側を通行させる（騎乗時は原則、左側通行）。このことにより、馬と馬との間に御者（保持者）が入り、馬同士が蹴り合うことはない。車などとすれ違う場合も同様であり、馬と対象物との間に御者が入るために安全である。



因みに、日本の競馬場のパドックは左回りであるが、イギリス、フランス、アイルランドなどの欧州のパドックは右回りであることもある。パドックや装鞍所などの周回方法のメリットおよびデメリットは、以下のとおりである。

<右回り>

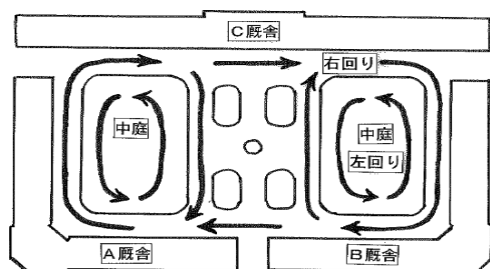
- ・御者には、馬のスピードをコントロールする高い技術が求められるとともに、馬の躰が重要となる。
- ・御者は馬の外側を歩くため、馬より速く歩かなければならない。
- ・馬を内側に押しながら引くことにより、結果的に綺麗な円を描ける。
- ・円の中央で馬を見る人（馬主や検査者など）に対し、馬の全身を見せることができる。
- ・刺激がある側（パドックでは外側の観客など）に信頼関係ができていない御者が立つ形となるので、馬は安心する。

<左回り>

- ・御者は馬の内側を歩くため、右回りに比較して移動距離が短いため楽である。
 - ・外側（パドックでは観客）に対し、馬の全身を見せることができる。
 - ・リードを引くと馬の後肢が外に振れるため、描く円が不整になりやすく、外側に立つ者が危険である。
- ※なお、日本の競馬場のパドックは、施設の構造上、観客と馬との距離を十分に確保しているため、安全である。

(4) 当事業所での引き馬方法**<引き馬の回り方>**

当事業所では、以下の理由から、原則的には右回りでの引き馬を指導している。なお、トレーニング・センターや競馬場のパドックなどの実態を考慮し、左回り（厩舎構内の内馬道）も実施している。



厩舎構内での引き馬の回り方

- ・厩舎は口の字型であり、馬は厩舎内側の洗い場に中庭に向けて張られる。その洗い場に面した馬道を他馬が引き馬される場合、張られた馬と引かれる馬との間に御者が入り、人馬の安全が確保される。

- ・御者は回転しながら馬の外側を歩くためには、馬の歩くスピードのコントロールが求められ、誘導の技術力や馬とのコミュニケーション力が高まる。また、馬より先に歩かなければならないため、しっかりと歩くことが求められる。
- ・馬を内側に押しながら引くテクニックを学習し、結果的に綺麗な図形が描ける。
- ・歩様検査で求められる。



安全のため、馬と馬との間に人が入る形になる右回りを基本としている

<引き馬の装具>

引き馬の際は、馬の気性や調教進度（躰の段階）、運動を行う環境、御者の技術、体格などを考慮し、馬が暴れた際に危険がないような装具を選択する。

このため、技術的に未熟な課程生が引き馬する際は、チフニーの装着を義務付けている。なお、指導者もチフニーあるいはチェーンシャンクのいずれかを必ず使用している。

大人しく躰ができていない馬にもチフニーを装着する理由は、不測の事態に対する最低限の備えである。例えば、集団でピッキングなどを行う際、他馬に誘引されて騒擾することがあるが、このような場合に対応できる。



チフニーをつけて行うピッキング

また、馬の気性や調教進度に合わせて徐々に作用の弱い装具を選択する。例えば、馬が環境に慣れ、落ち着いた精神状態であるにもかかわらず、リップチェーンなどの強い持続作用をもつ装具を使用し続けるはならない。なお、リップチェーンなどの装着は常にプレッシャーオンの状態が維持されるため、当事業所では使用していない。

2) 駐立



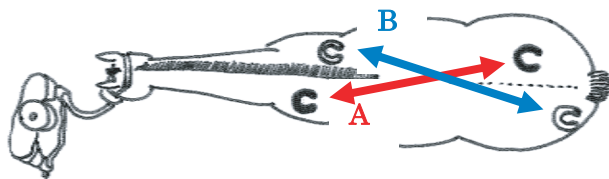
人との駐立写真の一例

(1) 方法

馬体検査や写真撮影などにおける駐立では、御者と馬との間に一定の距離を保ち、静止状態を維持することが求められる。このためには、調教（主にグラウンドワーク）で培った人馬の意思疎通、良好な主従関係が不可欠となる。また、毛艶などのベストな状態を披露できるように、使用する頭絡、無口などを綺麗に手入れしておく他、以下の点に留意するべきである。

- ・展示などに出す前に、タテガミは水ブラシを実施して右側に寝かせる。
- ・リードは口元がすっきり見えるように1本のリードを使用する。
- ・馬の口元でリードを保持するのではなく、一定の距離を保つ。
- ・蹄油を塗布し、四肢が重ならないように右側を狭踏みさせた状態で立たせる。

<スムーズに駐立をさせるポイント>



- ① 駐立の軸となる左前肢と右後肢の距離 **A** を決定する。馬が指示を理解して自ら停止した場合、通常 **A** の距離は適正になっている場合が多い。
- ② 交差する対角の位置 **B** を半歩の前進後退によって調節する。一歩動かすと、軸がずれる。後ろへ半歩動かすための前方からのプレッシャーとして、「親指で胸骨を押し」指示を教える。このことにより、軸である距離 **A** を動かさずに駐立させることが容易となる。

※御者は、求める馬の肢の位置を確実に把握している必要がある。

(2) 撮り方

馬の管理者は、ベストの状態を写真に収められるように努力する必要がある。綺麗に手入れし、無口、頭絡などは清潔なものを使用する。撮影場所は背景や時間帯も考慮し、事前に決定して整備しておく。

<撮影時の注意事項と手順>

- 光線
 - ・順光で立たせる。
 - ・光線が強過ぎる場合は、影が強く出て見苦しくなる。
 - ・撮影時刻は、やわらかい光が斜めから入る午前中が望ましい。
- 撮影場所
 - ・平坦で蹄が明瞭に見える場所を選択する。
 - ・背景が煩雑ではない場所を選択する。
- 風向き
 - ・無風が望ましいが、風がある場合は、尾が股間に巻き込まれない方向に立たせる。
 - ・タテガミが落ち着く方向を考慮する。原則としてタテガミの垂れていない側、左表で駐立させる。
- 立たせ方
 - ・駐立展示と同様、頭部（顔）を若干撮影者に向け、額の白斑が見えるようにする。

- ・(保持者の手の写り込みを避けるため) リードは長めに保持する。

○撮影テクニック

- ・心臓に対して水平に狙う。
- ・絞りを開ける(被写界深度を浅くする)こと、ズームを使って引き寄せることなどにより、背景を軽くぼかす。
- ・馬に接近しすぎると写真の周囲が歪むため、少し離れた場所から撮影する(距離: 5~10m)。

○シャッターを押す前の確認事項

- ・馬(四肢)が画面に平行に収まっている。
- ・確実に駐立している(肢を休めたり、蹄が地面から浮いたりしていないこと)。
- ・保持者の手が画面に入っていない。
- ・助手が馬の前で注意を引くことにより、両耳を前方に立たせる。



駐立写真の一例

(3) 馬体検査

<実施目的>

馬体検査は、基本的な躰および個々の状態に合わせた馬体管理や手入れができていないかを確認すること、必要に応じて適切な指導をすることを目的としている。

また、常に躰の実施を留意させ、普段の取扱において人が馬のリーダーであるとの意識を持たせること、更に、(先々は馬主やお客様へ対し)担当馬の披露を念頭においた馬体管理や手入れに対する意識を一層向上させることも副次的な目的である。服装は端正なものとし、帽子と手袋は必ず着用する。

このように、適切な馬の取り扱い方を徹底することにより、人馬共に安全な環境が確保される。

<着眼点>

○引き馬(インスペクション含む)・駐立状況

- ・馬が人の動きに注意を向け、自発的に人の動きに合わせているか。
- ・人は馬の肩部の横に位置し、人馬が快活に歩いているか。
- ・一本のリードでコントロールできているか。
- ・駐立の際は、人馬の間に一定の距離を保ち、静止を維持できるか。

○長毛を含む馬体の管理・手入れ状況

- ・タテガミから蹄に至るまで、馬が美しく手入れされ、皮膚に艶があるか。
- ・馬に適切なトリミングがなされているか。

- 主役はあくまでも馬であるが、担当者は自身の服装も意識する必要がある。



馬体の検査(尾)



馬体の検査(頭部、皮膚、タテガミ)

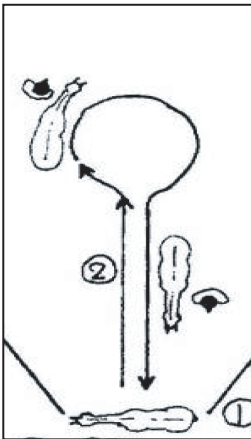


歩様の検査（常歩）

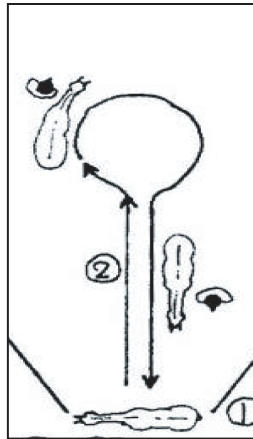
<実施手順>

- ① チェックを受ける準備を整え、各厩舎あるいは引き馬で待機する。引き馬の際は、一本のリードでチフニーを装着する。
- ② 自身の順番になったら、A、B 厩舎前の 2 箇所馬体検査を実施する。下図の①の位置で走路方向に向けて駐立させる。
- ③ 馬体検査の後は、②のラインに沿って歩様検査（インスペクション）を実施する。行きは常歩（回転部含む）、帰りは速歩に移行する。
- ④ 馬体および歩様検査に、何らかの不備があった場合は、求めるレベルに達するまで個別指導する。

□□□□□□□□ C 厩舎 □□□□□□□□



○検査官○



○検査官○

□□□□ A 厩舎 □□□□

□□□□ B 厩舎 □□□□

馬体検査の流れ

5. 騎 乗

1) 騎乗の手順

(1) 確認事項

<騎乗馬の確認>

前日夕刻の厩舎打合せ後、騎乗予定馬（馬体の状況を含む）を確認する。ただし、騎乗予定はあくまで予定（その後、馬の体調不良などによって変更の可能性もある）であるため、翌朝の入厩時に再度確認する。担当者、継続騎乗者以外は、当日の騎乗者から馬の健康状態（四肢の状態や外傷の有無など）や癖、装鞍時や騎乗時の注意点などを聴き取り、理解したうえで翌日の騎乗訓練に臨む。

<騎乗者の服装>

騎乗時の服装は以下とする。清潔感を心掛け、シワの付いた服や汚れたブーツは着用しない。なお、騎乗訓練においては、必ずヘルメット、ボディプロテクターを着用する。

○シャツ

・襟付きとし、課程生は派手な色や柄物は着用しない。

○上着（ジャンパー等）

・フードの付いているものや、風切音の出るものは着用しない。

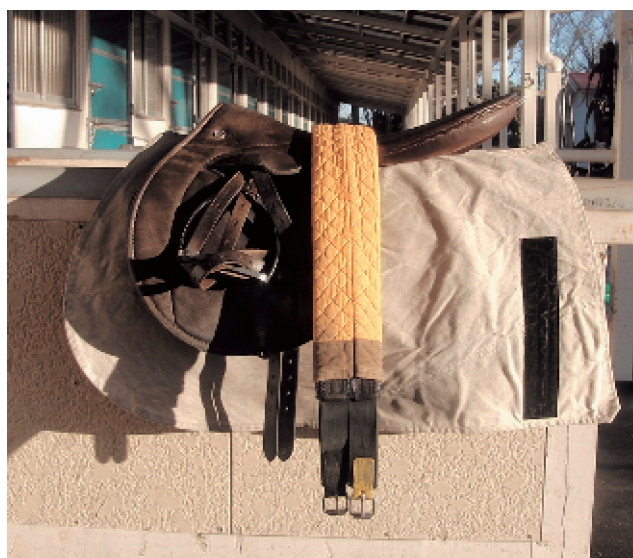
○ブーツ

・長靴の他、レッグチャップスの使用も可能である。
・使用後は、毎日手入れして泥汚れを拭き取っておく。

(2) 装鞍と脱鞍の手順

<装鞍準備>

騎乗馬の無口やリード、馬具（鞍、頭絡など）の異常の有無を確認し、騎乗馬の馬房横の鞍置き台に準備する。各馬に指定された走路用の片ゴム腹帯は、腹帯カバーを着けて使用する。走路用腹帯の長さは、長いものから緑、青、白、黄の布が縫い付けられている。



準備された調教鞍

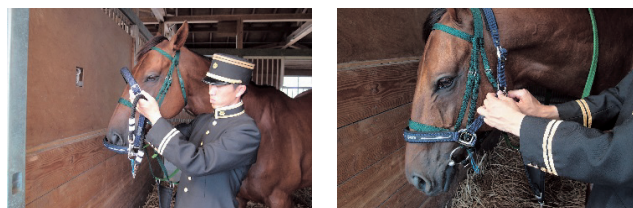
<装鞍（調教鞍）>

課程生が手順を確実に身につけるまで、装鞍は目が行き届く洗い場で実施するが、それ以降は馬房内での実施とする。

騎乗馬に声をかけながら馬房内に入り、頭絡およびマルタンガールを装着し、頭絡の上から無口を着け、洗い場に引き出して張り綱で張る。



①まず、頭絡を装着する。



②頭絡の上から無口を着け、顎革を止める。

馬房内で実施する場合は、出入り口に対して斜横向きになるようにタイチェーンで繋ぐ（P.9参照）。



タイチェーンに繋いで装鞍

体温測定（38.5℃以下が平熱）や裏掘りなどの騎乗前の手入れ（P.23参照）を実施する。その後、四肢の帯熱、腫れなどの馬体異常をチェックしながらブラシをかける（背に異物はないか、腫れや痛みがないかも手で触れてチェックする）。

装鞍は細心の注意を払い、以下の手順で実施する。

- ① スポンジゼッケンの中央線を馬の背線に合わせ、その前端がキ甲の少し前に出るように置いて鞍を乗せる。このとき、ゼッケンを一度前に出した後少し後方に引き、毛並みを整えて適正な位置に合わせる。
- ② 必要に応じて鞍の位置を調整する。鞍は、前橋がキ甲の頂点から若干後方に位置するように置く。キ甲部分に当たるスポンジゼッケンを上に引き上げ、キ甲の圧迫を軽減させる。
- ③ 馬の右側に回り、番号ゼッケンのしわの有無を確認し、腹帯を下ろしてマルタンガールを通す。
- ④ 再び馬の左側に回り、腹帯を緩く締める。マルタンガールの腹帯との連結部が、中央部になるように合わせる。このとき、腹帯を急激に強く締めると、馬が驚いて腹囲を膨化させて転倒することもある。このため、腹帯は徐々に締め、腹帯の尾錠が左右同じ高さとなるように調整する。特に、調教鞍での騎乗時には、馬の急な動きによって鞍ずれが発生し易いため、確実に締める。
- ⑤ 腹帯が適正な帯径の位置にあること、人差し指と中指を腹と腹帯との間に差し入れ、適正な腹帯の締め程度であることを確認する。また、指を上から下へすり下ろし、毛並みを正しく整える。最後に、鞍や頭絡などの各部を再点検する。
- ⑥ タテガミは水ブラシを実施し、時間があればクォーターマークを施す（P.24参照）。



装鞍完了

<装鞍（競走鞍）>

競走鞍は極めて小さく、伸縮性ゴムの下腹帯と上腹帯を用いて着用するため、装鞍は必ず馬の左右に位置する2名（左：装鞍者 右：補助者）で実施する。

なお、模擬レースにおける装鞍は、馬のテンションや環境が異なることから、人馬の安全を考慮し、必ずもう1名がリードを保持して馬房内で実施する。



人がリードで保持して装鞍（模擬レース時）

装鞍は、必ず馬の帯径より前方で作業し、馬の回し蹴りに十分に注意して以下の手順で実施する。

- ① 事前に競走鞍一式を組んでおく（鞍下スポンジ→鉛ゼッケン→番号ゼッケン→鞍→上下腹帯→腹帯スポンジ→鞍ずれ防止シート）。



事前に組まれた競走鞍一式

- ② 装鞍者は組まれた鞍を持って馬の左側、補助者は上腹帯と鞍ずれ防止シートを持って右側に位置する。
- ③ 装鞍者は組まれた鞍を馬の背中に乗せ、補助者は鞍下を巻き込まないようにサポートする。



鞍一式を馬の背に乗せる。

- ④ 補助者は右側の尾錠を止めた下腹帯にスポンジを挟み、鞍がずれないように上から確実に押さえ、反対の手で下腹帯の他端を左側の装鞍者に渡す。
- ⑤ 装鞍者は受け取った腹帯を均等に伸ばしながら、スポンジ上に装着する。腹帯を下方に十分に引き伸ばしてから、スポンジ上に引き上げるイメージである。その後、腹帯下のスポンジと番号ゼッケンを整える。



腹帯は下方に十分伸ばしてから引き上げる。

- ⑥ 補助者は上腹帯をキ甲に乗せ、両方から同じタイミングで引き下げ、装鞍者は腹下中央で尾錠を止める。



上腹の尾錠を止める。

- ⑦ 装鞍の完了後は、前肢のストレッチを実施して皮膚のはさみ込みを改善する（前肢は腱部ではなく、前腕部と球節あるいは繋ぎ付近を持ち、真っ直ぐ前方に伸展させる）。



最後に、両前肢のストレッチを実施する。

<脱鞍>

騎乗訓練後は、下馬して洗い場へ入れ、ネクストラップからマルタンガールを外して脱勒し、無口に着け換えて脱鞍する。脱勒前に腹帯を解くと、馬のわずかな動きによって鞍がずり落ちることがあるため、この順序を誤ってはならない。

下馬後は、忘れずにアブミを上げ、脱鞍する際は腹帯の左側から解く（革腹帯は馬の右側に回って解く）。再び、馬の左側に回り、鞍一式を若干後方に下げてから、持ち上げて静かに下ろす。

タイチェーンで馬装した場合は、下馬後、馬房内に引き入れて脱勒し、無口を装着してタイチェーンで繋ぐ。脱鞍後、張り綱をリードとして代用し、洗い場に引き出して手入れを開始する。

(3) 乗馬と下馬

<乗馬と下馬>

乗馬する際は、ヘルメットの顎ひもや手袋の装着、腹帯の確実な締めを確認してから騎乗する。競走馬では騎乗時の突発事故も多く、騎乗してから顎ひもなどを装着することは禁物である。また、洗い場での乗り降りは禁止とし、必ず厩舎前の通路で実施する。

足上げ乗りでは、左手で手綱とタテガミを持ち、右手を鞍の前橋部に置き、左足を後方に上げる。補助者は、その左足を持ち上げ、騎乗者は、腹から鞍上に乗ることなく、上半身を起こした状態で上がり、速やかに右足で鞍を跨ぐ。右手でしっかり体重を支え、静かに鞍に座って鐙を履き、腹帯の締め具合を再確認する。下馬は、手綱を放さず静かに実施する。



足上げ乗り

(4) 馬装点検

<腹帯>

騎乗前に確実に締め、騎乗後も直ちに締め具合を確認する。騎乗訓練においては、運動の開始前に馬装点検の時間が与えられるが、安全のために騎乗直後の馬装点検を習慣付ける。



馬装点検

<アブミの長さ>

アブミの長さは、下を向かず、履いた状態で周りの状況に気を配りながら調節する。また、その際は手綱をまとめて片手で持つ。なお、騎乗時は安全のため、特別な指示がない限り常にアブミを履いておく。特に走路騎乗において、厩舎構内および走路騎乗の開始までは、運動内容に合わせてアブミを長くしていることが好ましい。騎乗訓練終了後も、下馬するまでのクーリングダウン中は、長さを調整して履いておく。



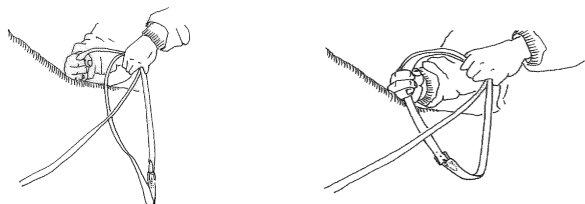
アブミを伸ばしたクーリングダウン

(5) 騎乗後の馬体チェック（走路騎乗時）

走路訓練で追い切り（ハロン15 - 15以上）を実施した後は、馬体の異常有無を確認し、その内容を必ず指導者に報告する。また、当事業所では、異常の有無に関係なく、故障などの未然防止の観点から、両前肢への冷却材の塗布を義務付けている。

(6) 手綱の持ち方

手綱は安全と拳の安定のため、シングルブリッジあるいはダブルブリッジで持つこととする。



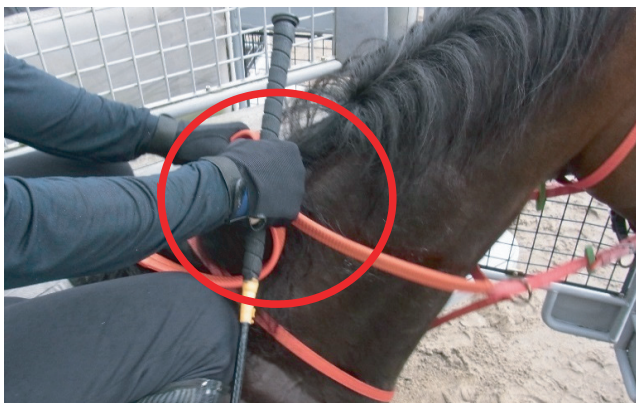
左：シングルブリッジ 右：ダブルブリッジ

また、馬の騒擾に備え、初めて騎乗する馬や休み明けの馬に騎乗する場合、あるいは騎乗後から馬が落ち着くまでの間は、マルタンガールに連結されたネクストラップに指をかけておく。



ネクストラップの持ち方の一例

一方、ゲート発進の際は、馬の動きに遅れない（あおられない）ため、ネクストラップ（長さに遊びがある）ではなく、タテガミの根元を持つことが望ましい。また、ゲート専用のネクストラップを使用する場合もある。



ゲート内ではタテガミを持つ。



ゲート専用のネクストラップを持つ。



タテガミを持ってゲート練習

2) 騎乗時の留意事項

(1) 馬場の入退場時

馬場入場の際は、「お願いします」と大きな声で挨拶する。これは、指導者のみならず、馬場の整備者などすべてのスタッフに対して入場を知らしめるとともに敬意を表わすことを意味する。



馬場入場時の挨拶

さらに、以下の点に留意して馬場に入場する。

○歩様検査

- ・走路騎乗においては、馬場入場後、速歩（前傾姿勢）で歩様検査を実施する。その際、指導者に「お願い

します」と声を掛け、指導者のOKの合図があれば、「ありがとうございました」といずれも大きな声で伝える。

○馬場内の出入りの優先順位

・馬場内の出入りの際は、原則として馬場内で運動している馬を優先する。

○周回方向（矢印）を必ず確認する。



周回方向を表す矢印（橙：外走路 青：内走路）

(2) 馬場内での運動時

<走路>

○原則として、遅い馬（常歩、速歩、ハッキング程度の遅いキャンター）は内ラチ側、速い馬は馬場の中央を使用する（ただし、指導者が指示した場合は除く）。

○速度が速くなり、前の馬を追い越す際は、相手に伝わるように声を掛け、外側から追い越す。危険防止のため、絶対に内側から追い抜かない。また、合図を受けた先行馬の騎乗者は、徐々に内ラチに寄り、後続馬の進路の妨げにならないように努める。

○馬場内の張り縄およびセーフティコーンは、ラチとみなす。

○当事業所における普通キャンター（ハロン23-20）は、中央走行とする。

○走路から退場する場合は、馬場の出入り口の通過後に常歩で後方を確認し、馬を内側に回転させ出口に向う。

<200m 走路及び400m 走路>

○駈歩は、中央走行あるいは中央より外側を可能な限り正手前で走行する。

○200、400m 走路からの退場は、一度走路内馬場に入れた後に周囲を確認して実施する。

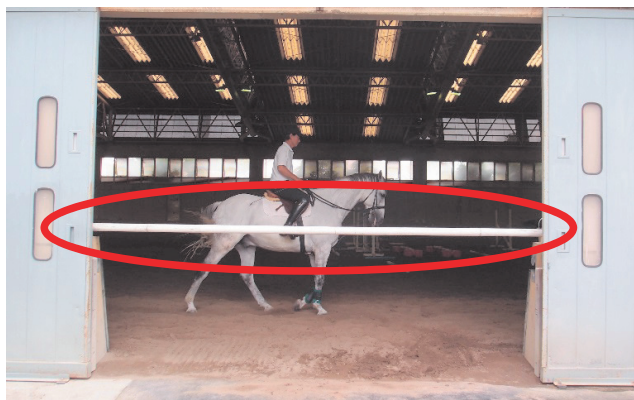
○200m 走路から直接厩舎地区へ戻る場合は、一度右側（厩舎地区とは反対側）に出て、半巻きしてから戻る。

<角馬場及び馬道>

○騎乗時に対向馬が来たり、馬道などで対面した場合は、基本的に左側通行とする。なお、当事業所における引き馬では人馬の安全のため、右側通行とする（P.40参照）。

<覆馬場>

安全のため、運動時には必ず出入り口（大扉あるいは引きラチ）を閉鎖する。



引きラチが閉鎖された訓練中の覆馬場

(3) 歩法別の注意点（走路騎乗時）

<常歩・速歩>

内ラチから1m程度の間隔を開けて実施する。

<駈歩>

駈歩は、コーナーの入口あるいは出口を利用して発進する（コーナー入口では正手前、出口では逆手前になりやすく、扶助操作を習得できる）。また、速歩への移行は、特別な理由がない限り直線で実施する。

競走馬の管理と取り扱いに関する指針〔厩務のグラウンドワーク〕

2015年12月発行

編集・発行 競馬学校

千葉県白井市根835-1 〒270-1431

電話 047-491-0333（代表）

許可なく、本書の一部または全部の複写、複製を禁じます。

